

第24回

日本歯科医学学会学術大会記念誌

第24回日本歯科医学学会
学術大会準備委員会 編



大会記念誌発行に際して

—日本歯科医学会学術大会のターニングポイント—

第24回日本歯科医学会学術大会会頭

日本歯科医学会会長

住友 雅人

日本歯科医師会（以下、日歯）は2013年4月に公益社団法人となり、それまで独立した会計で運営されていた日本歯科医学会（以下、学会）は、日歯の中の一組織の位置付けとして、これまでとは大きく様変わりした状況での事業運営が求められました。

2016年、福岡市において、福岡歯科大学を主幹校として第23回日本歯科医学会が開催されました。日歯の20%経費削減は内部組織の学会にも及び、総会開催費用も大幅に減額されました。そこで、第24回の開催を見据えて、「学会あり方検討協議会」において日本歯科医学会総会のあり方について協議がなされました。『これまで主幹校をお願いしていたが、各大学も教職員数の削減を図っており、総会開催の負担が大きい。学会の会員は約10万人にも関わらず、多大な経費とエネルギーを費やしても実際会場に来られる人数は多職種などを含めて2万人以下である。日歯会員のみならず分科会会員の参加も少ない。』などが課題となり、従来から予算を抑えた形で、多くの方が現地に足を運ぶ意義ある総会とするための戦略が求められたのです。

協議会の答申から、第24回日本歯科医学会学術大会は日本歯科医師会事業の「学術大会開催に関する事柄（日本歯科医学会規程第2条二）」を行うことから、日本歯科医師会と日本歯科医学会の主催とすること、日本歯科医学会規程第22条の3「学術大会に会頭を置く。ただし、学会会長が会頭となることができる。」に基づき、大会の会頭を日本歯科医学会会長が担うこと、総会の名称を学術大会に変更することが承認されました。学会加盟の分科会と全国7ブロックの歯科医師会の年次学術大会の併催も可能となり、学術大会の会場費などの費用負担の軽減とともに、学会会員であれば個別の分科会会員でなくてもどのプログラムにも参加できるという、歯科の世界の多様化を知る大変意義ある機会が得られることになりました。

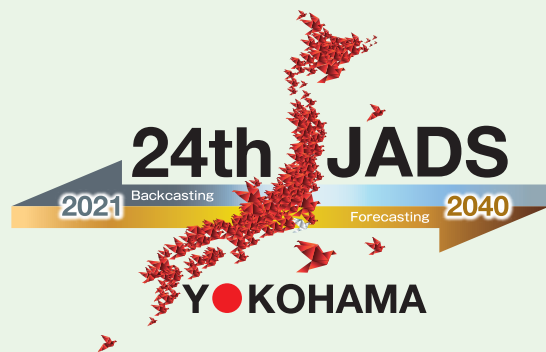
「学術大会は4年に1回開催する（日本歯科医学会規程第22条2）」となっていますが、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催と重なるために、第24回日本歯科医学会学術大会は、翌年の2021年9月23日から25日に開催することとなりました。

しかし、2020年初頭からの新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、学会に加盟する各団体の学術大会はもちろんのこと、世の中のあらゆる集会在中止や延期となり、順調に進んでいた学術大会の準備も大きな見直しを余儀なくされました。まさに大会テーマの逆転の発想が求められたのです。1年の先送りは時間的余裕となりました。このような情勢下での開催様式を検討した結果、全面オンライン開催となりました。参加登録者にとっては、3日間の会期のプログラムは、オンデマンド配信により会期後約1か月にわたり、都合のよい場所、時間にアクセスできるという利便性が生まれました。新型コロナウイルス感染症の終焉を迎えることは人類の願望ではありますが、わが国の歯科界最大規模の第24回日本歯科医学会学術大会は、今後のニューノーマルとして、学術集会の新しい形を社会に示すことができます。言い換えれば、ここでの取り組みは、さまざまな学術集会への開催様式のサンプル提供ともいえるのです。

私たちは歯科医学・歯科医療をもって社会貢献をしており、いかなる困難な状況下でも学術的な進歩を止めることはできません。とりわけこの新型コロナウイルス感染症には、歯科としての対応能力をもって戦いを挑んでいきます。日本歯科医学会学術大会のターニングポイントに合わせて企画したこの大会記念誌（オンライン配信）は、みなさんが共通の認識を持ち得ることから、第24回日本歯科医学会学術大会にとどまらず、歯科界の今後の展開において大きな意味を持ちます。人類の歴史における困難なときに立ち向かう想いを一段と強くし、社会に歯科界の存在を示しましょう。

CONTENTS

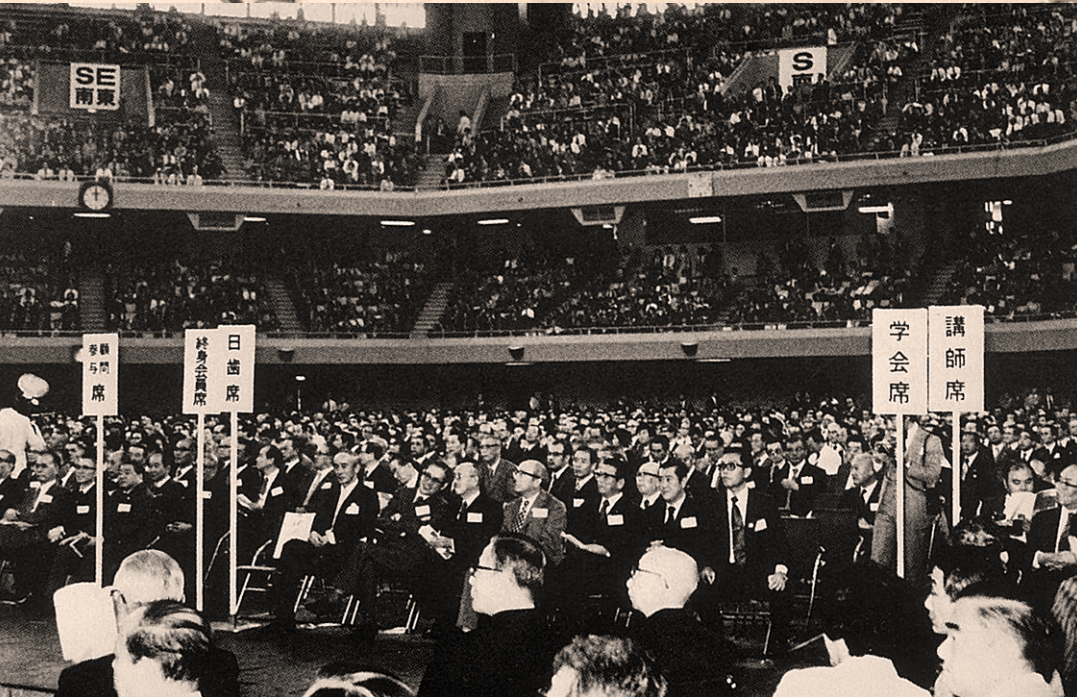
第1部	日本歯科医学会のあゆみ	4
	日本歯科医学会における学術大会の回顧	5
1.	歯科医学会の起源は（発祥の年は）	7
2.	「皇紀二千六百年記念歯科医学会」〔昭和15年（1940）〕について	11
3.	日本歯科医師会学術会議から日本歯科医学会へ	18
4.	昭和49年（1974）の機構改革	27
第2部	座談会 学術大会のニューノーマル	30





第1部

日本歯科医学会のあゆみ



日本歯科医史学会
 石橋 肇
 佐藤 利英
 渋谷 鑛
 西巻 明彦
 (五十音順)

日本歯科医学会における学術大会の回顧

日本歯科医史学会理事長

日本大学客員教授

渋谷 鑛

わが国における歯科の発展史，特に近代歯科医学の始まりは明治期の米国からの移入によるものです。

それ以前は「口中科医」と呼ばれる医師はいましたが，現在の歯科のような治療内容ではなく内科医として漢方薬を処方する程度に過ぎませんでした。一般には「歯抜き師」，「入歯師」や「口療治者」と呼ばれる，大道で香具師まがいの医療行為（？）が行われる程度でした。米国を中心とした外国人歯科医師の治療を目の当たりにして，当時のまがいの者の歯科医たちは愕然としたことでしょう。欧米人たちが繰り広げる新しい「歯科 Dentistry」は目から鱗だったに違いありません。

このような時代背景から，明治期にはそれ以前の口中科を踏襲することはなく，それまでなかった「歯科」という目新しく斬新な呼称を先人は選択しました。その後は「医科」との対峙の歴史が始まります。明治時代中頃には，医師法成立に際して歯科医師は医師に含まれないという思わぬ事態に遭遇し，自力で「歯科医師法」を成立させます。まさに，自立自尊の気概があったのです。

さて，黎明期の歯科界においてアカデミアと称されるものは何であったでしょう。今回テーマとなった「日本歯科医学会のあゆみ」から覗くことができます。これらを明らかにすることは，先達への敬意も含まれるものと思います。明治，大正，昭和，平成そして令和という流れの中で，いかに歯科医学会が変遷・発展を遂げてきたのかを提示することは，現在の歯科医人の責任でもあります。それは，次世代にきちんと伝えることによって歯科医学会の連続性を保証することになるからです。

今や，日本歯科医学会会員は日本歯科医師会会員と分科会会員とで10万人超の大所帯となりました。歯科医師は知的専門職の担い手です。それらを生涯にわたってアカデミアな部分で担保することは日本歯科医学会の大きな役割です。現在，歯学部教育から臨床研修医制度，さらに歯科医師免許に加え専門医制度や生涯研修など，シームレスな一貫性をもった制度の検討がなされているのもその証です。

「過去を振り返ることは未来に対して責任をもつことである」（ローマ法王，聖ヨハネ・パウロ二世，1995年）の言葉にあるように，歯科医学会の発展史を眺めてみることで，今の歯科医学会のあり方を模索しながら，途切れることなく未来に継承しなければなりません。第24回日本歯科医学会学術大会がそのスタートになるものと確信しております。

なお，今回の参考史料は医歯薬出版の創立者 今田見信氏が整理保存しているものが多数でした。史料保存の重要性を改めて認識するとともに，伏して深謝いたします。

2021年8月 東京五輪開催とコロナ禍中に



はじめに

わが国の近代歯科医学の歩みは、慶応元年（1865）以降に外国人歯科医師が来日したことに始まる。明治7年（1874）の医制制定後、小幡英之助は医術開業試験に「歯科」で合格し、翌年医籍登録を行った。このとき、「歯科」は公称ではなく小幡英之助が独自に使用したものである。その後、明治12年（1879）の医術開業試験規則に突如「歯科試験」が出題されたことにより、「歯科」という語が普及していく。やがて、明治39年（1906）には歯科医師法が制定され「歯科医師」の身分法が確立される（医師法と同時制定）。しかし、歯科医師となるための歯科医育機関は未整備であった。東京歯科医学専門学校（専門学校令による）が誕生するのは明治40年（1907）であり、それ以降、歯科医師の養成は主として私立の学校によって行われた（明治40年の歯科医師数は913名で1/5が東京市内在住だった）。

その後、大正7年（1918）の大学令においても歯科は大学学部（分科）として認められることなく経過し、私立の「歯科医学専門学校（歯科医専）」（東京歯科医専、日本歯科医専、大阪歯科医専、九州歯科医専、日本大学専門部歯科、東洋女子歯科医専、日本女子歯科医専）が医育機関として存在し、官立では昭和3年（1928）に東京高等歯科医学校が初の創立となる。歯学は私学たる所以である。

第二次世界大戦敗戦後はGHQの指令により、歯科界の大改革が断行される。初の歯科大学・歯学部は医学部と同じく専門学校から6年制の大学へと受け継がれ、新制の歯科医師会の発足とともに今日のような隆盛をみている。この間、歯科界のいわゆる学術分野を担ってきた「歯科医学会」の発展経緯について本稿で記載することとする。

歴史は時々書き改めなければならない。それは新しい史実の発見のみならず、新しい見方が出てくるからである。

1. 歯科医学会の起源は（発祥の年は）

2. 「皇紀二千六百年記念歯科医学会」〔昭和15年（1940）〕について

3. 日本歯科医師会学術会議から日本歯科医学会へ

4. 昭和49年（1974）の機構改革

1. 歯科医学会の起源は（発祥の年は）

一次資料として「日本歯科医学会沿革概要」（日本歯科医学会，大正12年刊，総頁数18）（以下，資料1）がある。この資料をもとに年表を作成した（表1）。

「歯科医学会」その名称が公に登場するのは，明治期に遡る。

渉猟できた資料から推察すると，「歯科医学会」という名称が，用いられるようになったのは明治36年（1903）11月27日以降である（月日不詳：資料1より，爾後年月不詳ナルモ大ノ一字ヲ削単ニリ日本ト称スルニ至レリ）。当時創立された「歯科医会」〔歯科医師の集会，明治26年（1893）設立〕の学術団体創設準備委員会が起源で，その後「日本歯科医会」〔明治35年（1902）〕，「大日本歯科医会」〔明治36年（1903）〕と改称されている。すなわち，明治26年11月28日にわが国初の歯科医師の有志団体「歯科医会」が発足し，それに付随するように明治35年に「日本歯科学会」が誕生した。その後，明治36年11月27日に「歯科医会」から「大日本歯科医会」と改称後に，独立して「日本歯科医学会」と呼称するに至った。

この点について，今田見信は次のように述べている。

「・・・明治36年11月27日に日本歯科医学会が誕生したいきさつは，ざっと次のような経過をとっているのだ。明治26年5月14日，芝公園の三緑亭に在京の歯科有志が集まって結成していた歯科医会が，明治29年11月28日の年次総会で，日本歯科医会と改称して，わが国の中心団体がはじまった。それから満4年を経過した明治33年11月の年次総会で，全国学術団体を創設する決議をした。調査委員8名を置いて各方面の情報をまとめることとなり，その翌年の34年12月の年次総会で調査委員会の報告を可決した。翌月の明治35年1月25日築地精養軒で臨時総会を開いて日本歯科医会に附設した学術団体としての歯科医学会を創立することになり，発会式をあげたのである。この時の会長は伊澤信平，副会長榎本積一，理事5名，評議員10名だった。

ところが事業目標のちがう会が一方に属した形ではおかしいという意見が強くなって，その翌年の36年に母会である日本歯科医会は医師会の全国組織にならって大日本歯科医会に改組することになって，同年11月27日に臨時総会を京橋の地学協会で開き，日本歯科医会を一応解散して，附設の学術団体である歯科医学会を分離独立させ，母会である日本歯科医会は大日本歯科医会とし，歯科学会は日本歯科医学会と改称したのである。

従って，日本ではじめての全国組織の学術団体であるところの日本歯科医学会は，明治36年11月27日に誕生したことになるわけだ。」〔今田見信．アルバムとところどころ（75）．歯界展望1967；33（3）〕

また，アルバムとところどころ（16）〔歯界展望1964；23（5）〕では写真1を掲載し，

「・・・ここに掲げた写真は明治36年11月28日（日本歯科医学会が独立創設された翌日）に石原久氏の案内で学会関係者が創立記念のため東大庭園に参集し撮影したものである。伊澤会長の顔は見えないが，全国的に当時の歯学代表の顔が見られる。

それから後は，歯科界にも学校別又は地域別に学会が随時誕生して，日本医学会開催の都度波乱を呼んだが，太平洋戦争終結後，歯科界の民主化で日本歯科医師会からの呼びかけで日本歯科医学会が再び誕生し，昨秋その第10回総会を大阪（第10回日本歯科医学会総会 宮崎誓信会長1963年 大阪：著者ら加筆）で開いたのである。50年間の波乱を越えて，平和な学会が再来したことになる。」と，日本歯科医学会の発祥時期について明言しながら，その後の歯科界を皮肉交じりに記しているのは興味深い。

明治36年以前の研究会やスタディグループとして，「歯科交詢会」（小幡英之助門下：明治20年創立，翌21年解散）や「歯科談話会」（榎本積一門下），「歯科交話会」（伊澤信平門下），「歯科長交会」（従来開業一門，富安晋，榎本積一ら：明治31年創立，明治33年解散）などが挙げられるが，それらはあくまで私的な学術集団であった。

源流をどこに求めるかは多くの意見があるが，本稿は明治36年（1903）を「日本歯科医学会」発祥の時としたい。

表 1 歯科の学術団体としての「日本歯科医学会」略史「日本歯科医学会沿革概要（日本歯科医学会，大正 12 年 3 月）を中心に

			本文より	歯科医事衛生史 ¹⁾ ほかより
1890	明治 23 年		当時の東京府内歯科医療担当者調査（伊澤道盛） 歯科医師 40 名 従来家入	れ歯師 140 名（東京都歯科医師会七十年史，1968. p.29 より）
1893	明治 26 年	7/1		歯科医会設立 警視庁認可（東京都歯科医師会前身） わが国初の歯科医師団体 5/14 歯科医懇親会（伊澤道盛 小幡英之助 高山紀齋）東京在住 45 名中 35 名参加事実上歯科医会の発起人会
1894	明治 27 年			全国歯科医数は約 200 名，2 月名古屋，3 月大阪，歯科医会を組織
1896	明治 29 年			11 月 28 日日本歯科医会に改称
1900	明治 33 年	11 月	日本歯科医会第 8 回定期総会に於いて全国学術団体を創設するの議決し調査委員（8 名）を設ける 訳語調査会設置（歯科学術用語の選定）	
1901	明治 34 年	12 月	同第 9 回総会提出し議定	
1902	明治 35 年	1/25	日本歯科学会 成立（築地：精養軒） 会長：伊澤信平 副会長：榎本積一 理事：小川勝一 高橋直太郎 青山松次郎 荒木盛英	第 1 回日本聯合医学会
1903	明治 36 年	10 月	歯科月報第一号 発刊（別添 歯科医事衛生史）	4 月初の全国歯科医の大会開催（大阪）：大日本歯科医（師）大会 会長 西村輔三
	明治 36 年	11/27	日本歯科学会 → 大日本歯科医学会 に改称 会長：伊澤信平 副会長：富安 晋 理事：藤島太麻夫 高橋直太郎 塚原 傳 小川勝一 奥村鶴吉	日本歯科医会 解散 大日本歯科医会（日本歯科医師会の前身）創立 会長：高山紀齋 副会長：榎本積一， 理事：血脇守之助， 曾根龍蔵， 佐藤運雄， 名誉会長：小幡英之助， 渡邊良斎， 西村輔三 例：大日本歯科医会 東京部（会）
	明治 36 年	12/8 ?	日本歯科医学会 に改称（爾後年月不詳ナルモ大ノ一字ヲ削ニリ日本ト称スルニ至レリ）	36 年 11 月，日本歯科医学会 名称となる。日本歯科医学会独立式，役員名同一（東京都歯科医師会七十年史 p.49，56 より）
1904	明治 37 年	6 月	第 2 年定期総会 次年度より宿題報告を設ける	3 月までに地方部の設立通知（東京部，大阪部，京都部ほか 27）
1905	明治 38 年	4 月	第 3 年総会 宿題報告「歯槽膿漏症」佐藤運雄 小川勝一 高橋直太郎	
1906	明治 39 年	4 月	第 4 年総会 宿題報告「歯科消毒法」小川勝一 高橋直太郎	第 2 回日本聯合医学会に第 16 分科会（実際は 17 分科）として初参加
	明治 39 年	5 月 2 日		歯科医師法成立
1907	明治 40 年	4 月	第 5 年総会 会長 伊澤信平（留任）	明治 39 年 12 月～榎本積一 会長（高山紀齋）代理代行（大日本歯科医会）
1907	明治 40 年～41 年		日本歯科医会（後の日本歯科医師会）との紛糾	明治 40 年 4 月 7 日 日本聯合歯科医会成立 部会から各地の歯科医師会 成立へ
1910	明治 43 年			第 3 回日本医学会（大阪）に参加（高橋直太郎独断で決定した功績） 西村 輔三 歯科分科会会長
1911	明治 44 年	4 月	第 9 年総会「日本歯科医学大会」名で開催	
	～			大正 2 年「歯科医学懇話会」 大正 7 年「日本歯科口腔科学会」→「日本口腔科学会」
1923	大正 12 年	3 月	第 21 年次総会	
1940	昭和 15 年	11 月 7～9 日	皇紀二千六百年記念歯科医学会（東京 共立講堂） 会長：島峰 徹 副会長：加藤清治 準備委員長：佐藤運雄 ³⁾	
1942	昭和 17 年			第 12 回日本医学会歯科分科会（大阪開催：弓倉繁家分科会会長）は日本口腔科学会として参加 ²⁾
1945	昭和 20 年	8 月 15 日		敗 戦
			以下 資料 歯科医事衛生史 第 1 巻，日本医学会会報，日本歯科医師会創立 110 周年記念誌 ほか より	
1947	昭和 22 年	10 月 31 日	法律第 128 号 旧 日本歯科医師会解散 11 月 1 日 新制（社）日本歯科医師会	5 月 16～18 日第 1 回日本歯科医学大会（会長：加藤清治）GHQ 要請約 2,000 名参加 ⁴⁾
1948	昭和 23 年	4 月	日本歯科医師会定款（8 月 31 日認可） 第 7 章 学術会議 第 60 条 学術会議は歯科医学および歯科医師の進歩発展を図るため毎年 1 回以上これを開く。	日本歯科医師会会長：佐藤運雄 初代会長
1949	昭和 24 年	11 月	日本歯科医師会学術会議総合歯科学大会（第 1 回）：東京	議長：青木貞亮
1950	昭和 25 年	10 月	日本歯科医師会学術会議総合歯学会総会（第 2 回）：東京	議長：川合 涉
1952	昭和 27 年	1 月	日本歯科医師会学術会議総合歯学会総会（第 3 回）：東京	議長：川合 涉
1952	昭和 27 年	11 月	日本歯科医師会学術会議総合歯学会総会（第 4 回）：東京	議長：檜垣麟三
1953	昭和 28 年	11 月	日本歯科医師会学術会議総合歯学会総会（第 5 回）大阪開催「学術会議」から「歯科医学会」，「毎年」を「2 年」に改正	学会会長：檜垣麟三 大会委員長：緒方終造
1955	昭和 30 年	10 月	日本歯科医学会総会（第 6 回）アジア歯科医学会（第 1 回）	学会会長：沖野節三
1957	昭和 32 年		「歯科医学会」を「日本歯科医学会」に改正	
			以降 昭和 32 年，34 年，36 年，38 年，41 年，44 年，48 年（第 7，8，9，10，11，12，13 回）に開催	
1960	昭和 35 年		日本歯科医学会の常置（7 分科会：歯科基礎医学会，日本歯科保存学会，日本歯科材料器械学会）	日本補綴歯科学会，日本口腔外科学会，日本矯正歯科学会，口腔衛生学会，
1974	昭和 49 年	4 月 1 日	日本歯科医学会新規則にて発足（日本歯科医師会会長：中原 實，日本歯科医学会会長：白数美輝雄）	機構改革 日本歯科医師会全会員を一般会員とする（学会の経済基盤が苦慮された）
1977	昭和 52 年		第 14 回日本歯科医学会総会	会長：関根永滋

1) 日本歯科医師会，第三節 歯科医学会，日本歯科医学会，第二回聯合医学会分科会及万国歯科学大会，歯科医事衛生史，前巻，日本歯科医師会；1940. p.508-14.
 2) 今田見信，アルバムとこところ (43) 第 6 回日本医学会第 16 分科会の幹部，歯界展望 1967；28(1).
 3) 島峰 徹，皇紀二千六百年記念歯科醫學會々誌，皇紀 2600 年記念歯科醫學會；1941.
 4) 鈴木 勝，第 13 回日本歯科医学会総会準備委員会 特別講演，わが国の歯学発展の回顧と展望，1973.



写真1 全国歯科学術団体のはじまり〔今田見信. アルバムところどころ (16). 歯界展望 1964 ; 23 (5)〕



写真2 第2回日本医学会歯科分科会(日本歯科医師会. 歯科医事衛生史. 前巻. 1940. p.513)

その後の、黎明期の歯科界の学術団体や学術分野における特記事項は「医学会」との関連性である。詳細は別に譲るが、第1回日本聯合医学会が開催された明治35年(1902)に歯科はその分科として参加しないで、明治39年(1906)第2回の日本聯合医学会から第16分科会(実際は17分科)として参加することとなる(写真2)。奇しくも歯科医師法成立の年でもあった。会長は東京帝国大学歯科教室教授 石原久である。これが現在の日本医学会の第31分科会「日本口腔科学会」として継承されている。

もともと東京帝国大学医学部の歯科学教室が主催した「歯科医学懇話会」が始まりで、大正7年(1918)に「日本歯科口腔科学会」に改称された。歯科医学会とは全く別組織で発展してきた史実がある。東京大学医学部の歯科学教室のいわば私的な学会が医学会の分科会につながったとも考えられる。医歯二元論のもともなっている。この点について、今田見信は「第12回(昭和17年:著者加筆)の大阪開催以来、歯科分科会の参加団体は、日本歯科医師会傘下に全日本的な統一学会である日本歯科医学会が出来たために、日本口腔科学会だけとなった」と述べている〔今田見信. アルバムところどころ (43). 歯界展望 1967 ; 28 (1)〕。このことから複

雑な経緯があったことが想像できる。

さらに、長尾 優も昭和 20 年敗戦後における状況について、「歯科医学会では当時はまだ大学になりたてであり、大学そのものの整備拡充も不十分の時で、学問的雰囲気も、全歯科大学一丸となって自ら“総合歯科医学会”を構成するように盛り上がっておらなかったこと、また佐藤会長の心の内に、折角金森君が分科会長となり、着々準備を進め、正に従来の形で分科会として医学総会に加入するように一路進めているのに、との配慮が働いた結果、時期尚早になったのだと思われる。やむない仕儀であった。かくて昭和 26 年東京にて開催された、第 13 回“日本医学会総会”には従来の如く第 31 分科会（金森会長）を構成して“日本口腔科学会”の名の下に参加したのであった。」（長尾 優、一筋の歯学への道普請：東京医科歯科大学のあゆみ、医歯薬出版；1966. p.101）と回顧している。戦後の大学昇格とともに、新生歯科医師会の誕生に伴う学術会議の発足から、日本医学会総会に対峙した歯科医学会の創設を考えていたことがわかる。

「歯科医学会」の歴史は、明治期においては歯科医育機関や法制度が未完成で学術団体として独立することはきわめて困難であり、歯科医会（歯科医師会）の協力体制において始まったということになる。この時期は、従来家の取り締まり、医術開業試験や医師法成立時の経緯などにより、歯科医師会は歯科医政のみならず医師会との対峙という面でも、歯科界の学術分野の充実をはかる必要性に迫られていたことが想像される。

資料 1 から「明治期から大正期の歯科医学会大会」について表 2 に抜粋した。この期間は毎年のように総会が開催されていたことを知る。

表 2 明治末期から大正期における歯科医学会大会について

開催年月	総会年次	会長	副会長	理事	宿題報告	担当者
明治 44 年 (1911) 4 月	9	伊澤信平	高橋直太郎	門石長秋, 水野完爾, 渋谷義雄, 海老原堅, 三輪義幸		
明治 45 年 4 月	10	血脇守之助	河村利次郎	門石長秋, 白井勝一, 能勢邦士, 水谷茂吉, 喜多見行正		
大正 2 年 (1913) 4 月	11	血脇守之助	河村利次郎	全部重任	腐敗根管ノ処置	奥村鶴吉 原了介 志村誠磨
大正 3 年 4 月	12	血脇守之助	河村利次郎	門石長秋, 水谷茂吉, 能勢邦士, 尾崎稀三, 佐野 寛	歯髓保存療法	能勢邦士 日下卓四郎
大正 4 年 4 月	13	血脇守之助	河村利次郎	全部重任	亜ヒ酸歯髓失活法	川上為次郎 佐藤運雄
大正 5 年 4 月	14	河村利次郎	門石長秋	水谷茂吉, 能勢邦士, 佐野 寛, 尾崎稀三, 小池子一	知歯難生	遠藤至六郎
大正 6 年	15	花澤 鼎	門石長秋	川上為次郎, 鈴木三良, 能勢邦士, 佐野 寛, 小池子一	歯髓ノ疾患	小野寅之助 武田 讓
大正 7 年	16	花澤 鼎	門石長秋	全部重任	齲蝕ノ発生及予防法	奥村鶴吉 佐藤運雄
大正 8 年	17	花澤 鼎	門石長秋	鈴木三良, 佐野 寛, 小池子一, 遠藤至六郎, 吾妻三郎	有床義歯ノ維持法	川合 涉 松井禮七
大正 9 年	18	高橋直太郎	能勢邦士	佐野 寛, 小池子一, 吾妻三郎, 田村一吉, 松原 勉	可撤性架工義歯	岡田 満 松本信太郎 高橋松太 堀江銈一 渡邊 悌
大正 10 年 4 月	19	高橋直太郎	能勢邦士	留任	歯系腫瘍ノ病理, 診 断並処置	遠藤至六郎 西村豊治
大正 11 年 4 月	20	高橋直太郎	能勢邦士	留任	知歯難生	西村豊治 照内 昇
大正 12 年 3 月	21	高橋直太郎	能勢邦士	留任		

2. 「皇紀二千六百年記念歯科医学会」〔昭和15年（1940）〕について

わが国歯科界の歴史的資料の1つに「歯科医事衛生史」が挙げられる。その後巻（昭和33年10月発行）の凡例には「明治40年から昭和20年までの歯科医事衛生の変遷を記述し、以て現在に於けるその由ってくるところを執筆した。」とある。しかし、昭和15年（1940）に開催された「皇紀二千六百年記念歯科医学会」については全く記載されていない。昭和16年（1941）12月25日に発行された「皇紀貳千六百年記念歯科醫學會々誌」を参考資料に、日本歯科医学会の歴史の一ページに加えたい。稀覯本である。

「皇紀貳千六百年記念歯科醫學會々誌」（写真3）は、総頁数418、発行編輯者代表は島峰徹で、非売品である。学会の事前、事後抄録ともいえる。本書によると、皇紀二千六百年記念歯科医学会は昭和15年（1940）11月7～9日に開催、当時の9つの歯科医学専門学校が主体となって実施され、4分科会総演題数が243題、学術映画供覧なども行われ、分科会形式として初の試みであり、わが国最大級の学術研究の発表の場であった。昭和15年は、日独伊三国同盟の成立、大東亜共栄圏の基本国策の発表や大政翼賛会結成などがあり、砂糖、マッチの切符制が始まった年であり、戦争色が強く感じられる学会でもあった。なお、本書から日本歯科医師会の協賛、後援を読み取ることはできなかった。

以下に、本書の総集会記事からの抜粋を示す（写真4～6）。

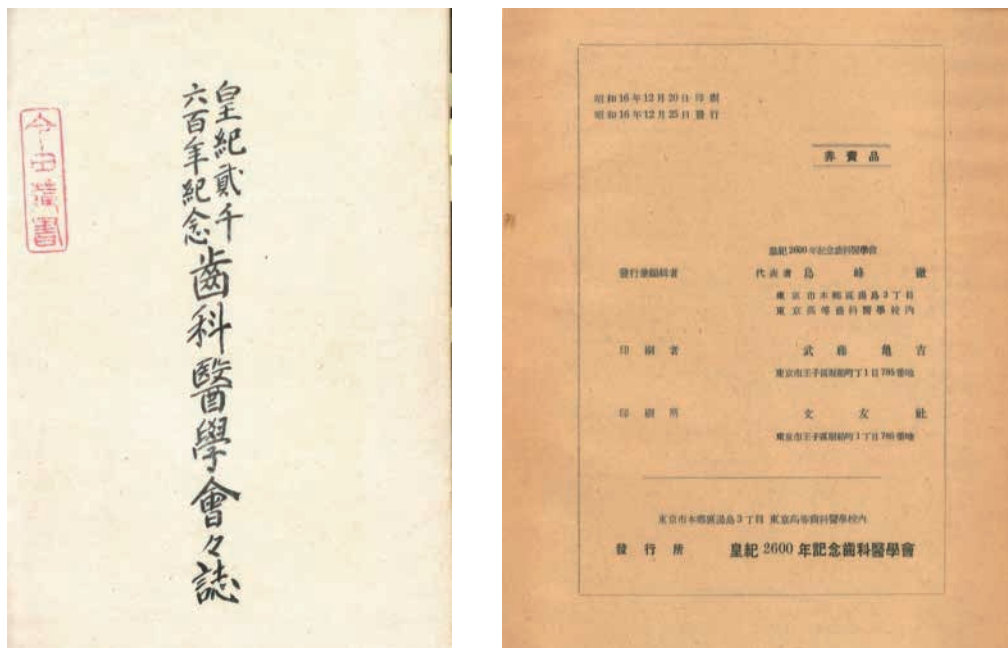


写真3 皇紀貳千六百年記念歯科醫學會々誌から
左：中表紙，右：奥付。

皇紀二千六百年記念歯科医学会

総集會日程

会期 昭和15年11月7～9日

会場 共立講堂

11月7日 午前9時50分来賓着席

記念式 午前10時

1. 開式の辞
2. 国家斉唱
3. 宮城遙拝
4. 橿原神宮遙拝
5. 近江神宮遙拝
6. 戦没将兵英霊黙禱，皇軍勇士武運長久祈願
7. 閉会の辞

開会式

1. 開会の辞
2. 会長挨拶 会長 島峰 徹
3. 準備委員長経過報告 準備委員長 佐藤運雄
4. 祝辞 午前11時

記念講演 文部大臣 橋田邦彦 閣下

11月9日 午後0時30分開場

特別講演

午後1時 腫瘍の發生に就て 東京帝国大学教授医学博士 緒方知三郎氏

閉会式

午後3時10分 閉会の辞 会長 島峰 徹

概況

菊花薫るの候皇威愈々四海に輝き瑞氣宇内に漲るこの聖代に2600年の皇紀を迎ふるは吾等臣民の幸福是に過ぐるものなし。此の佳辰に際り全国歯科医学専門学校協同主催を以て開催する皇紀2600年記念歯科医学会は、その分科4，加ふるに歯科医学発達史料，学術参考品，歯科機械材料薬品書籍の展覧会を特設し，歯科医人，学徒が燃ゆる熱意もて凡有知見を披瀝し，貴重なる研鑽努力に依る業績を発表し，相互に学的検討を加ふる豪華大絵巻を繰り展げた。時霜月7日皇国をあげての2600年奉祝式典に先立って大内山を拝す一ツ橋共立講堂を中心として一ツ橋講堂，学士会館，矢野記念館，日本大学歯科附属医院を会場として学華は二重橋前広場の菊花と共に爛漫として咲き出たのである。

国内斯界の先輩権威者多数の来賓参列し学会に一段の光彩を添え，会員は遠くは満州国，中華民国，朝鮮より，南は南洋，臺灣，沖縄，九州，四国，北は樺太，北海道より，この世紀の記念学会に参加する正会員，準会員は四千に垂んとし定刻前より会場へと吸込れて行く。

学会当日本部並総集会場共立講堂を中心として，第1分科会場は共立講堂を使用し保存歯科学（歯槽膿漏を含む）並其の基礎学を，第2分科会場は学士会館を使用し，補綴歯科学及矯正歯科学並其の基礎学を，第3分科会場は一ツ橋講堂をあて歯科外科学及口腔外科学並其の基礎学を，第4分科会場は日本大学歯科附属医院をあて最近歯科学の実際の示説，模型供覧及学術映画を，歯科医学発達史料展覧は矢野記念館を，学術参考品展覧は日

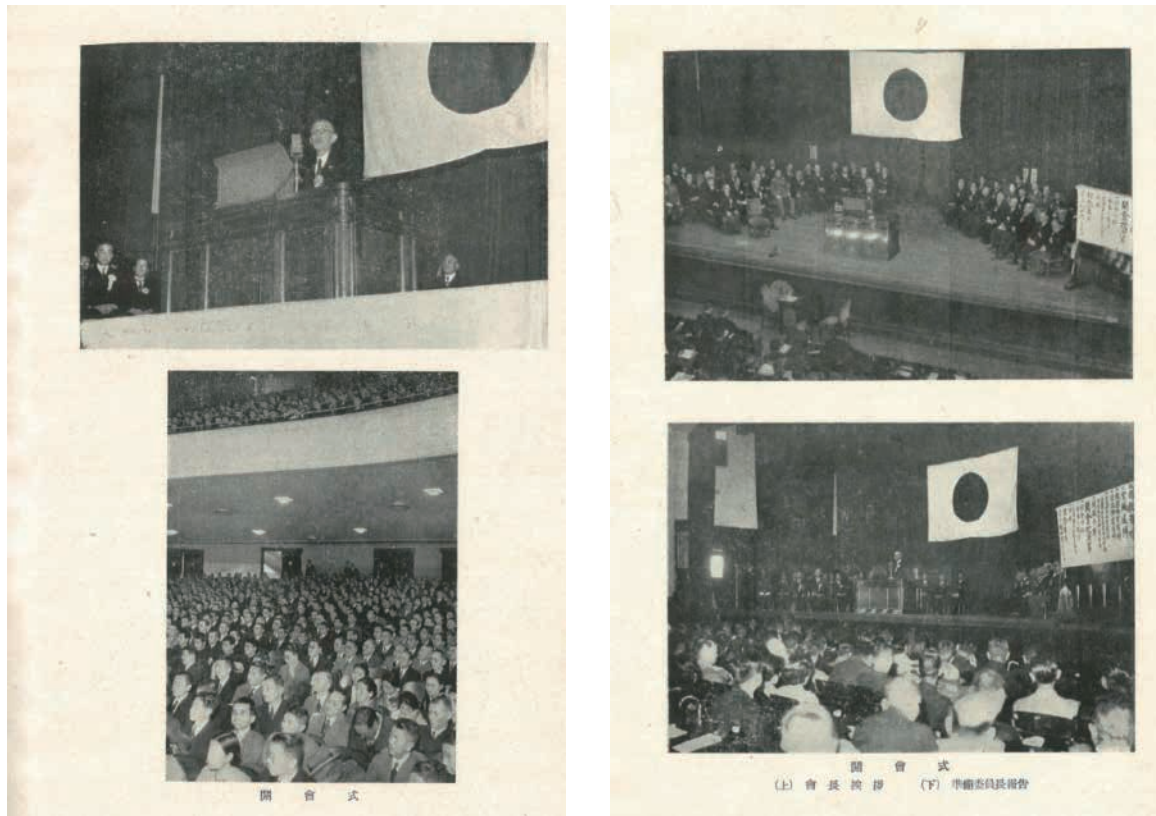


写真4 皇紀二千六百年記念歯科医学会開会式

本大学歯科校舎並矢野記念館を、歯科機械、材料、薬品、書籍は一つ橋講堂及共立講堂を使用して之を為す。

総会、4の各分科会及び参観見学は4日間に亘り別項各分類記述の如く聖戦下にふさわしく緊張盛会裏に終始し、齊せる貢献は空前なる全国歯科医人を打って一丸となし得たるのみならず学的にも頗る偉大にして日本歯科学を数段高きレベルに押し進め日本歯科学の躍進を印象づけ多大の示唆を投じ、皇紀2600年記念歯科医学会矜持の喜びに浸り開会の辞を述べる島峰会長の頬紅潮して見えた。

会期中第一日正午の会長招宴、夜の協賛集会、参観見学等は来賓始め遠来の会員の労を慰し和気藹々のうちに交驩した。

斯くして4日間に晝夜亘る戦時下に相応しき有意義なる幕は閉された。

第1日 記念式

全国歯科医人の皇紀2600年奉祝の式典及学会当日なる11月7日を迎えた。開会式直前になって小雨降り出したけれども開会時刻が午前10時と云うに午前9時半さしものに広い共立講堂も立錐の余地なき迄に人も以て埋めつくされた。

定刻午前10時厳かなる振鈴鳴り響くや一同肅然として威儀を正して着席すれば司会者陸軍歩兵中佐芦田六之助の指示により一同起立国家を斉唱し、終って宮城遙拝、檀原神宮遙拝、近江神宮遙拝、戦没将士の英霊に黙禱並皇軍勇士武運長久祈念ありて荘厳なる記念式典を終る。

開会式

記念式が終わるや引続き開会式に移り島峰会長万雷の拍手に迎えられて悠然と登壇別項所載の如き開会の辞は力強く歯科界の新体制の黎明を告ぐるが如く場内に響き渡る。

次いで佐藤準備委員長は本学会の経過を報告し、同を壓する学的昂奮は彌が上に昇騰して行く。次いで日本歯

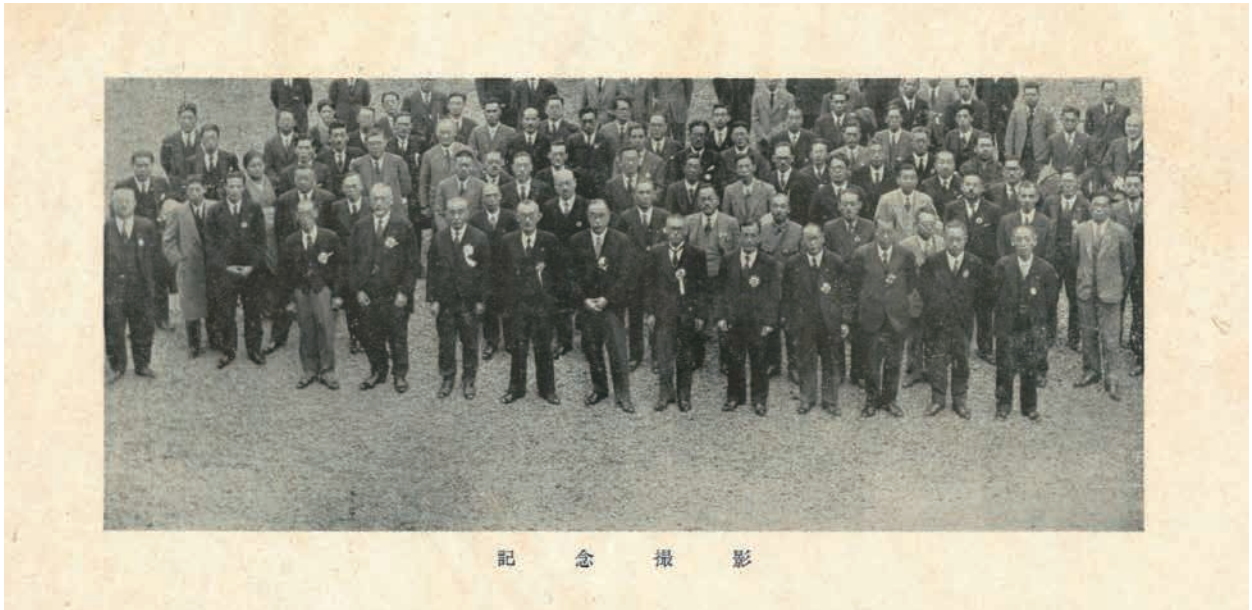


写真5 記念撮影写真

科学発達功労者として東京歯科医学専門学校血脇守之助氏、日本歯科医学専門学校中原市五郎氏を表彰し夫々表彰状を授与し、血脇氏のは西村豊治氏が立って受理し、中原氏は自ら立って表彰状を受理した。満場の一同は拍手して之に和し感激に酔う。

次いで各方面より祝辞は時間の都合で省略した。以上終えて橋田文部大臣の記念講演ある予定の處出席不可能となりたるを以て休憩となる。かくして第1日午前中の行事を終わる。

第3日 特別講演

4つの分科会は第3日即ち11月9日午前を以て全部閉会し午餐休憩後午後1時より共立講堂に於て特別講演行わる。

会員は零時半から続々詰めかけ定刻の1時には座席は勿論場内はすしずめの盛況であった。この日は秋晴れで瑞雲たなびく大内山を拝しつつ学会の最後を飾るにふさわしき日和なりき。

特別講演開始のベル鳴るや島峰会長は特別講演者東大教授緒方知三郎博士を紹介し、緒方博士は万雷の拍手に迎えられて登壇し「腫瘍の発生に就て」と題し説述され会員に多大の感銘を與えて嵐の如き拍手のうちに降壇す。

閉会式

緒方博士の特別講演終わるや島峰会長の特別講演者に対する謝辞に続き閉会の辞ありたる後、会長の発聲にて天皇陛下萬歳を三唱し4千の来会者之に唱和し、次いで皇紀二千六百年記念歯科医学会萬歳三唱してこの歴史的学会は閉会となる、時に午後3時。

この皇紀2600年記念歯科医学会について、今田見信は次のように回顧している。

「昭和15年(1940)は、日本紀元で2600年に当るといので、2600年記念のもろもろの行事が、いとも盛大に行われた。

わが歯界でも国の祭事に合わせて全日本的な何かを計画する必要性に迫られたので、各歯科医学専門学校、各同窓会、各歯科学会に呼びかけて記念歯科医学会を計画したのであった。

この昭和15年の背景を歴史年表で拾ってみると、南京に汪兆銘の国民政府が成立、日独伊三国同盟の成立、ルーズベルトの三選がなった年に当る。国内の政情は、大東亜共栄圏の基本国策の発表に全国民は酔わされたも

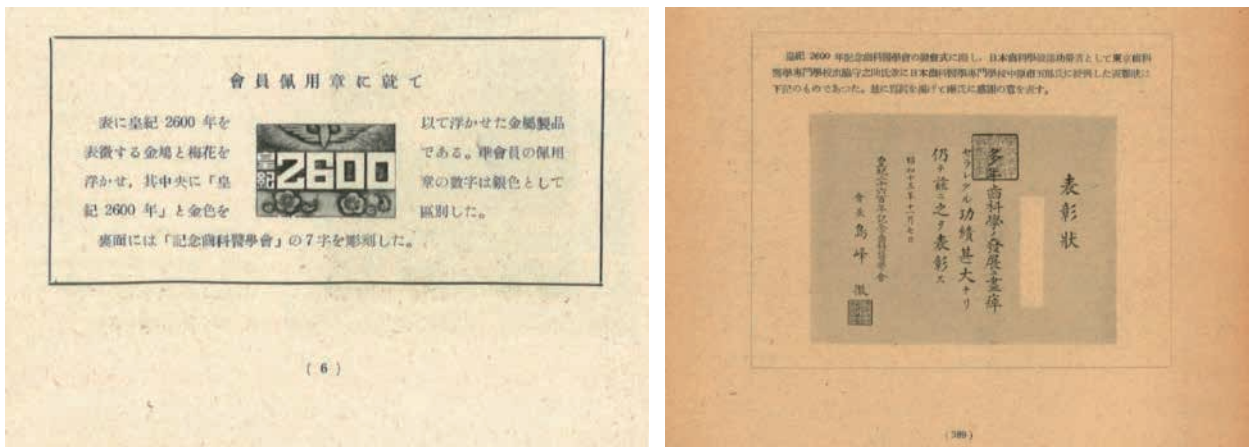


写真6 会員章と表彰状

のである。また大政翼賛会結成、大日本産業報国会結成、内閣府情報局開設、隣組の組織結成などがあり、砂糖、マッチの切符制が始まった年である。さらに厚生省が設置されて2年目であり、広範囲にわたる戦線は、わが国にきわめて有利であったが、その反面において統制と弾圧は強化の一途をたどり、その翌年には、いよいよ太平洋戦争の宣戦詔書が下ったのであった。

実にはかない記念の年、昭和15年ではあったが、わが歯界にとって、この記念歯科医学会だけは、全日本の歯科教育機関、歯科研究機関が大同団結して文字通りに一丸となった、わが国初めての大会であったことを歴史に留めるべきであろう。

この紀元2600年記念歯科医学会は昭和15年11月7日から9日に至る3日間、東京神田の共立講堂、一ツ橋講堂、学士会館、矢野記念館ならびに日本大学歯科附属医院で開かれたのである。

その頃、現存していた9つの歯科医学専門学校（東京歯科、日本歯科、大阪歯科、日本大学専門部歯科、九州歯科、東洋女子、日本女子、京城歯科、東京高等歯科：著者ら加筆）校長を学会委員とし、大学医学部の歯科主任14名を特別会員、島峰徹氏が会長、加藤清治氏が副会長、佐藤運雄氏が準備委員長、各歯科医専から推薦された教授18名が幹事になられ、校外から今田見信が事務担当幹事、岡田平八郎、国沢利明2氏が事務嘱託で、もろもろの会務が推進された。

東京を初め各都市から合計780名の準備委員を委嘱して、全日本的な歯科学会を造りあげたわけであった。ここに掲げる写真は学会初日の11月7日の記念講演（午前 橋田邦彦文部大臣 午後 緒方知三郎東大教授）を終わった直後、一ツ橋講堂前の広場で、講堂の上から撮影したものである。

最前列の中央に緒方知三郎博士がおられ、その左に島峰会長、右に加藤副会長、続いて学会委員、特別会員が並んでおられる。この中には一寸みただけでも30名近い死亡者が読みとれるのはまことに寂しい。

この記念学会の結成が足がかりとなって、戦後の学会の大同団結が漸く実ったとも言えないことはない。」

なお、記事の掲載写真（写真7）は記念誌の掲載写真（写真5）と同一であるが、記念誌よりも背景が大きく撮影されて立派である。

本記念歯科医学会の総演題数などについては表3に示した。総演題数は243題を数える。

開会の辞で会長の島峰徹は、紀元2600年を迎えるにあたって文部省から各学校に対して記念となる企画依頼があったことから、9つの歯科医師養成機関の指定学校で計画したこと、また当時いわれていた「新体制」の基本理念やこの学会を契機に革新的大改革が行われることを期待していることなどを述べている。

準備委員長の佐藤運雄は、新体制の確立のためには絶好の機会であり、新しい試みとして「分科会」方式をとったことや、基礎医学と臨床医学の連携を図ったことなど、演題数は243題に及んでいることへの感謝を述べている。また、閉会の辞での島峰徹は「実に我国歯科医学界始まりまして以来未だ会で見ざる所の盛会でありました。・・・之一つに会員各位の本学会に対する御理解と本学会役員の大努力の結果でありまして、茲



写真7 紀元2600年記念歯科医学会〔今田見信、アルバムとところどころ(40)、歯界展望1966;27(4)〕

表3 皇紀2600年記念歯科医学会の分科会演題数と日程

分科会	会場	第1日	第2日		第3日	計	
		午後1時 ~4時	午前9時 ~12時	午後1時 ~4時	午前9時~ 11時50分		
第1分科会	保存歯科学(歯槽膿漏を含む)並に其の基礎学	共立講堂	18	19~36	37~54	55~71	71
第2分科会	補綴歯科学及矯正歯科学並に其の基礎学	学士会館	18	19~36	37~54		54
第3分科会	歯科外科学及口腔外科学並に其の基礎学	一ツ橋講堂	18	19~36	37~54	55~70	70
第4分科会	最新歯科学實際の解説及実示並に模型及学術 映画供覧	日本大学歯科 附属医院					
	実示		5	6~10	11~15	16~19	19
	学術映画供覧		7	8~14	15~21	22~29	29
						計	243

に本学会の名に於て深甚なる感謝の意を表する次第であります。茲に、天皇陛下の万歳と本学会の万歳を三唱し以て本学会を芽出度く終わりと致しまして、閉会式をおわりたいと存じます。」と結んでいる。

まさに、皇国歯科医学会そのものであった。しかし、歯科医師医育機関9つの専門学校が主となって、歯科医師の一同団結には大きな影響力をもった歯科医学会であったことには間違いない。本誌の内容から推察すると、当時の歯科医師会は本会に後援や共催では関わっていないようである。

準備報告の項(p.369)に「東京府歯科医師会役員、東京府歯科医師会各区支部会長招待会が学会に先立ち9月3日に学士会館で開催されている旨」の記載がある。しかし、「東京都歯科医師会七十年史」(昭和43年刊)(p.250)に本学会の記載はないが、11月20日の皇居での政府主催の皇紀2600年記念式典への参席は記載されている。

また、「皇紀二千六百年記念歯科医学会」については、日本歯科医師会の「創立110周年記念誌」など各団体の記念誌においても触れられていない。ちなみに「歯科医事衛生史 前巻」に記載がみられないのは、昭和15年10月の発刊であり、当時の歯科医師会会長は血脇守之助、本会の開会式での表彰には欠席し代理の西村豊治氏が受章していることから何らかの事情が察せられる。

「東京歯科大学百年史」に記載はないが、「日本歯科大学60周年誌」(昭和46年刊)には5ページを割いて準備記事から11月7日の分科会演題が記されていた。「大阪歯科大学百年史」(平成24年刊)では、「・・・東京神田・共立講堂での紀元2600年記念歯科学会(11月4日)には小野教授以下8名が協力、東京二重橋前広場で

の祝奉大会（11月8日）にも難波大二（専21）、村本明（専21）らが学生代表として参加している。一方、本校内でも奉祝の式典（11月11日）を挙行している。この年は、万事が『皇紀2600年記念と皇室中心』を基調として進められたのである。」と記されている。また、「東京医科歯科大学創立五十年記念誌」（昭和53年刊）には、奉祝大運動会（11月2日）や奉祝式典（11月10日）が行われたことが5ページを割き記載されているが、「日本大学歯学部同窓会誌」にはみられなかった。

さらに、本誌準備記（p.384）には「協賛の夕経過」として、第1日（11月7日）「学生の夕」、第2日「健康教育の夕」、第3日（11月9日）「健康を讃える夕」と題した企画が行われていたことが記されていた。いずれも夕刻からの開始であり、講演、映画上映のほか、ライオン歯磨口腔衛生部やクラブ歯磨口腔衛生部の協賛で「咀嚼訓練」や漫才「節米問答」、スポーツ講話など、学生も含めた数多くの参加者が集った多くの行事が併催されていたことを知る。

トピックス

国民医療法と新体制（歯界新体制協議会）

戦時体制中は国民体力の向上が強調され、国民医療の制度全般に根本的な改革が行われた。医療制度の改善に関する事項を審議するため、昭和13年6月に政府は厚生大臣を会長とする官民組織からなる委員で構成される医薬制度調査会を設け、昭和13年7月に「国民医療の現状に鑑み現行医療制度改善の方策如何」が諮問され、昭和15年10月に答申、これを基礎として昭和17年2月24日に国民医療法要綱が法律第70号で国民医療法として公布された。

国民医療法は①医師・医療機関の開業に関する規則、②日本医療団の設立を主な内容とした。戦争下の戦力増強をはかり医療関係者に対し国策に一致協力するように要望し、医師法と歯科医師法の内容を改正しその統合を規定し新たに日本医療団を設置した。歯科医師会もこの国民医療法のなかに規定され、「国民医療法の適正を期し国民体力の向上を図るをもって目的」とされ、さらに「医師及び歯科医師は医療および保険指導を掌り国民体力の向上に寄与するを以て其の本分とす」と目的のほかにも本分も明記された。そして、疾病の予防と保健指導とを最大の目標とし、また、医療内容の向上を期するために医師、歯科医師の補修教育を受けなければならないと義務づけた。国民医療法は全医師、全歯科医師を網羅して、ひとつの国家目的に即応して強力な団体として動くことに根幹をおいたのである。昭和18年1月には厚生大臣から認可された歯科医師会役員は官選となり有給制の専務理事がおかれた。この体制は敗戦とともに消滅することとなる。官選会長は血脇守之助、副会長 加藤清治、専務理事 西村豊治であった。

この国民医療法制定は「医歯一元論」が再燃するきっかけともなる。歯科医学専門学校同窓会を巻き込み、この「新体制」について論争が繰り広げられる前にこの皇紀二千六百年記念歯科医学会は開催されたのである。「皇紀二千六百年記念歯科醫學會々誌」の記載内容から開会式の功労者表彰状を中原市五郎は自ら受け取っているが、血脇守之助は西村豊治が代理受理している。また、準備記事においても血脇守之助の代理で数多くの業務をこなしていたのは西村豊治である。

さらに、この皇紀二千六百年記念歯科医学会に関して、長尾 優は次のように回顧している。「・・・このような学問的に未熟な専門学校制を採っていたとしても、またたとえ群雄割拠のものでも、徐々ではあるが歳月とともにそれぞれ学問的に芽ばえ初め、必ずしも既成の医科大学側にのみ牛耳られたくない、との雰囲気も生じ、また学問の研究面でも、独自の気風が生じつつあったのであった。昭和15年に挙行した紀元2600年を記念した『皇紀2600年記念歯科医学会』は大凡この気運にのったものであったと、私は解釈しているのである。」

3. 日本歯科医師会学術会議から日本歯科医学会へ

昭和20年(1945)の敗戦後、日本歯科医師会はGHQの指令により新生「社団法人日本歯科医師会」として昭和23年(1948)に発足した。それと同時に、日本歯科医師会学術会議が定款によって決定された。したがって、新生歯科医師会の誕生と同時のスタートとなった。歯科医師会の定款(昭和23年8月13日)「第7章第60条 学術会議は歯科医学及び歯科医術の進歩発達を図るため毎年1回以上これを開く。」と明文化された。それに伴い、昭和24年(1949)11月に、第1回学術会議総合歯科医学大会が開催された。定款によると、名称の変更は昭和28年に「学術会議」から「歯科医学会」、昭和32年に「歯科医学会」から「日本歯科医学会」へと変わってきていることになる。

昭和24年から数えられている第1回から直近の第23回までの学会総会の概略を表4に示した。

その呼称も第1回総合歯科医学会〔昭和24年(1949)〕、第2回から第5回は総合歯学会(昭和25, 27, 28年)、第6回〔昭和30年(1955)〕から日本歯科医学会総会へと変遷してきた。

「学術会議発足に際して 日本歯科医師会学術会議々長 青木貞亮」〔日本歯科医師会雑誌 1949; 1(2): 77-8〕から抜粋する。

「終戦以来日本は、あらゆる部門において大転換が慣行されて居ることは既に何人も認めて居る処であるが、わが歯科界において、とくに画期的刷新と見るべき主なる一つは、歯科医師会の性格上に関する改変をあげ得るであろう。そして歯科医師会が古往のように、医制に重きを置いた団体でなく、学術の進歩発達を計る中心団体でもなければならなくなった。即ち、歯科学術の振興によって世界の文化に貢献し、人類福祉に益々寄与することも使命として全国歯科医人が一丸となって立ちあがったことである。

(中略)

去る年8月30日附で認可になった日本歯科医師会の定款、及び定款規範に基づいて「学術会議」と称せられる全国的一大会が始めて(ママ)日本歯科医師会に組成され、年々一回以上全国23,000余の会員が集合し、互いに学術の研究成績を発表し、考案、経験等を検討し合うという頗る民主的であり、積極的な新機構になったことは実に歯科界として大変革であって、従来分立の形にあった歯科学会と歯科医師会とが一体化されたともいえる。また一般医学会の隷属的立場にあった歯科学部会が独歩的に逸脱したともいい得るであろう。しかも、全国歯科学会人がすべての障壁を取り除いて学術を中心に纏合し、熱意の溢れるにいたった現状は、わが国歯科界の一大飛躍であり、同時に将来のために慶びにたえないところでもある。

もとより、学会は、会誌、会報、雑誌などとともに、学術の関する発表、普及の機関であり、学術進歩の源泉機関というべきであるが、とくに学会、大会は学者をはじめその道に関連をもつあらゆる人々が会合し直接発表し、検討を試み或る程度の結論と理解とをその場で得る絶好の機会であると同時に、この論究が何等かの形において実際化され、その活用によって人類福祉に直結されねばならないのである。しかるに従来存立して居った多くの学会は特定会員による発表機関であり、学者の奥深い専門的な研究発表の会合に偏し一般医人の参加が減少して行く傾向にあったように感ぜられたのである。

勿論日頃研究に専念する専門学者が集合し互いに業績を陳開して検討する権威ある機会は学術の進歩の上に絶対必要であるが、すべての派閥、障壁を超越した全国的集合でなければならないと信ずる。と同時に日々社会人に直接触れ、保健医療に関連を持つ臨床家の多くが参加し、学者の啓発的発表を中心に、自由に和やかに、真剣に経験を語り、考案を示し合う会合こそ必要であると思う。

(中略)

このような考察から新発足した学術会議も、わが国における歯科学術に関する研究発表機関として最大にして最高の権威ある機会であらしめたいと存ずる一面、全国歯科医人が最も親しみと期待とを以て参加され見聞によって得られた多くの収穫を積極的に臨床に直結し、社会に貢献すると共に、会員各自の福祉の基源たらしめた

いと念願しておる次第である。

昨年8月末日附を以て不省（ママ）重責を担うべく使命を受けて以来、幸いにも三顧問の積極的支援と、100名に余る権威ある学術部委員各位の熱心な協力とによって、23年度計画を実施致す事に努め、全国八地区歯科医学大会と合同又は協力を得て本会議を開催し予期以上の成果を収め得たのであるが、全国各地共に未曾有の盛会で終始し、特に関東大会における2日に渉る会員の熱心さ、討論は全く本会議の主旨に沿い活気を示し、また関西方面にあっても近畿地区（大阪）、九州地区（福岡）の盛会と豪華な開催振りは西日本の学府だけに予期に違わず、中国地区（広島）の大会も2日間の両日も会場狭しと苦情の出るほどの盛況の学会であった。他の地区の大会においてもまた同様で、学術会議の前途に大いなる光明を感じた次第である。要するにわが歯科界全医人が急速に向上心に燃えて来たに外ならぬものと大に敬服を感ずると同時に、我国歯科界将来のため誠に悦びとするところである。

兎に角23年度は、学術会議発足以来僅に3ヶ月を経ざる間全国八地区において急遽既定計画に従い遂行したので、連絡その他準備上に足りない処があったのであるが、その後回を重ねたる各部会委員集合によって樹てられた24年度計画案によれば

1. 学術会議 総合学会（純学術的発表大会）を1回本年度は大体秋季関東で開催
2. 学術会議 学術大会（地方歯科医学大会と合同）を4回開催し、合同開催にもれた地区大会は講師を派遣応援
3. 各学部会（5部会）を各部単独にて適当地にて開催

以上いずれかの大会においても講演内容は勿論、示説、供覧等にも充分な考慮を以てし、尚学校、研究所等の参観、あるいは特殊科目の講習会等をも計画し、参会会員に満足と裨益とをもたらず機会にしたいと各委員熱心に考慮中である。

（中略）

願くは新生学術会議の性格と、理念とする処とを了承され、新年度計画実施に期待をもたれ、歯科医師会の一大使命たる相互向上に積極的関心を寄せられるように切望致す次第である。」と結んでいる。

このように、学術会議の設立への思いと歯科界の円満な進歩を切に望んでいるとともに、医学会からの独立を喜び、一部の研究者の発表学会からの脱却をはかれたことなど進歩的で民主的な運営と臨床面への応用、開催の盛況ぶりを窺わせる。また、「一般医学会の隷属的立場にあった歯科学部会が独歩的に逸脱したともいい得る」という記述からは、医科との学問的劣勢にあった歯科界の独立進歩に大きな期待を寄せていたことがわかる。

続いて、本書に副議長 後藤恭平、各部委員長として基礎学部委員長 山崎清、保存歯科学部委員長 檜垣麟三、口腔外科学部委員長 中村平蔵、歯科矯正学部委員長 齋藤久、補綴学部委員長 入交直重の挨拶文が掲載されていた。全国の総合歯科医学大会のほかに地区での大会とそのなかに各部会をおいて細分化の開催も企図されていたことを知る。ちなみにこの時期の歯科の分科会の学会部門としては、基礎学部、保存歯科学部、口腔外科学部、歯科矯正学部、補綴学部の5部門であった。

当時の熱気とともに、各地方部会開催がきっかけとなり日本歯科医学会が大きく花開いたのである。また、往時の「歯界展望」5巻16号（昭和23年9月）のニュース欄では「日歯学術大会は分散」という見出しで掲載されている（写真8）。

表 4 戦後の日本歯科医学会の概要

	開催期間	会頭（会長）	場所	テーマ	演題数
第 1 回総合歯 科医学会	1949 年 (昭和 24 年) 11/12, 13	青木貞亮 (歯科学術会議 議長)	中央大学講堂 日本歯科講堂, 日本医科臨床講堂 (分科会)	①アルギン酸について ②アメリカ歯科医学の現状 (特別講演演題)	特別講演 2 題
第 2 回総合歯 学会	1950 年 (昭和 25 年) 11/19, 20	川合 渉 (歯科学術会議 議長)	中央大学講堂 日本大学歯学部, 医学部 (分科会)	①最新の化学療法剤につい て ② 10 月時点未定の記載 (特別講演演題)	特別講演 2 題
第 3 回 //	1952 年 (昭和 27 年) 1/20~22	川合 渉 (歯科学術会議 議長)	中央大学講堂 日本大学歯学部講堂 (補綴), 東京歯科大学講堂 (保 存), 日本大学医学部臨床講堂 (外科), 東京医科歯 科大学講堂 (矯正), 日本歯科大学講堂 (基礎)		総会演題なし
第 4 回 //	1952 年 (昭和 27 年) 11/15, 16	檜垣麟三 (歯科学術会議 議長)	中央大学講堂 東京医科歯科大学・技工室 (補綴), 病院治療室 (保 存), 第一講堂 (外科), 新臨床講堂 (矯正), 第二講 堂第三講堂新教室 (基礎, 衛生, 理工)	有床義歯について (補綴), 電気マヒ法の理論と應用 (保 存), 口腔癌診断治療の最近 の趨勢 (外科), 保定問題に ついて (矯正), 未定 (基礎)	各科別特別講演 5 題
第 5 回 //	1953 年 (昭和 28 年) 10/31, 11/1	檜垣麟三 (学会長)	大手前会館大講堂ほか	①歯牙疾患と全身病に就い て ②唾液腺ホルモン (特別講演演題)	特別講演 2 題
第 6 回日本歯 科医学会総会	1955 年 (昭和 30 年) 10/13~16	沖野節三 (学会長)	上野・学士院 (13 日・第 1 回アジア歯科学術会議 設立総会) 日比谷・第一生命ホール (14 日・第 1 回アジア歯 科医学会総会) 大手町・東京都立産業会館 (15, 16 日・各学会等)		各部代表講演 7 題, テーブル・クリニック 27 題, 特別講演 12 題
第 7 回 //	1957 年 (昭和 32 年) 10/26, 27	沖野節三 (学会長)	日本大学歯学部, 東京医科歯科大学, 日本大学法文 学部	①日本における歯槽膿漏症 に関する研究 ②日本における弗素問題に 関する研究 (特別講演演題)	特別講演 2 題
第 8 回 //	1959 年 (昭和 34 年) 10/24, 25	白数美輝雄 (学会長)	東京・九段会館 歯科医師会館 (補綴, 材料), 日本大学歯学部 (外 科, 放射線), 東京医科歯科大学 (矯正)	癌問題について (特別講演 テーマ)	特別講演 4 題
第 9 回 //	1961 年 (昭和 36 年) 10/19~21	長尾 優 (学会長)	東京・九段会館 歯科医師会館 (補綴, 材料), 日本大学歯学部 (外 科, 放射線), 日本歯科大学 (保存), 東京医科歯科 大学 (矯正), 私学会館 (歯科基礎), 九段高校 (衛 生)	①口腔癌の診断と治療 ②放射性物質と空気汚染 ③老人病と老人歯科学 (特別講演演題)	特別講演 3 題
第 10 回 //	1963 年 (昭和 38 年) 10/26~29	吉崎誓信 (会頭)	大阪フェスティバルホール 大阪府歯科医師会館 (基礎歯科, 保存, 補綴, 衛生, 材料), 日本生命中之島研修所 (外科, 放射線)	歯牙齦蝕症 (総会シンポジ ウムテーマ)	総会特別講演 3 題, 総会シンポジウム 3 部 (11 題)

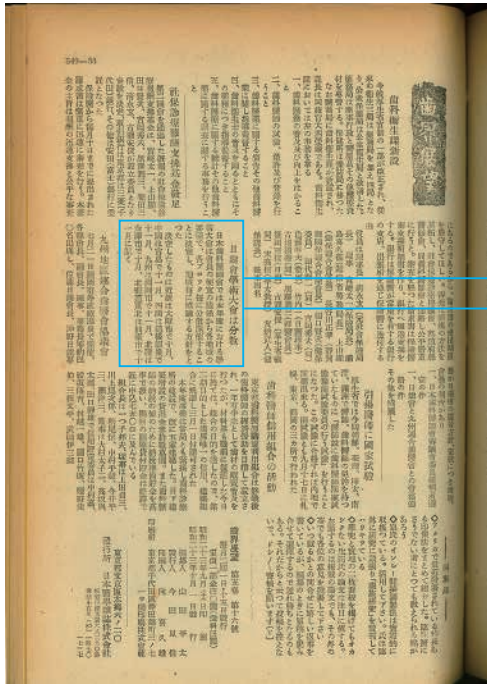
総会講演詳細	分科会	備考
①アルギン酸について (日本歯科大学・瀬戸 巖), ②アメリカ歯科医学の現状 (ドクトル・佐藤 精)	歯科基礎学会, 歯科保存学会, 日本補綴歯科学会, 口腔外科学会, 日本矯正歯科学会	総会後各分科会講習会開催. 日本歯科医師会会長 佐藤連雄. 歯科学術会議と称していたことから総会長は「議長」. 第1回総合歯科医学大会の議長は青木貞亮, 副議長は後藤京平. 占領下での総会開催には厚生大臣, 文部大臣の祝辞, 連合軍総司令部公衆衛生福祉局からジョンソン大佐の祝辞. 総会, 分科会という組織はなかった.
①最新の化学療法剤について (佐々貫之), ②演題未定の記載 (榎 恵)	歯科基礎学会, 歯科保存学会, 日本補綴歯科学会, 口腔外科学会, 日本矯正歯科学会	総会後各分科会講習会開催.
	歯科基礎学会, 歯科保存学会, 日本補綴歯科学会, 口腔外科学会, 日本矯正歯科学会	総会にて映画を供覧. 第1, 2回は戦後のアメリカ歯科界の視察談としての特別講演が, 当時のトピックスであったアルギン酸印象材の話題, 抗生物質療法が取り上げられ, 第3回では単価問題すなわち保険制度が特別報告で, 医療制度が話題になり始めていた. 日本歯科医師会学術会議 8 地区学術大会が地方開催されている. 四国, 関東, 北信, 東北, 近畿, 中国, 九州, 東海の各地区で学術大会. のちに定款の改正とともに各ブロックごとの学会に発展することになる.
①有床義歯について (山口秀雄, 溝上喜久雄), ②電気マヒ法の理論と応用 (鈴木賢策), ③口腔癌診断治療の最近の趨勢 (中村平藏), ④保定問題について (斎藤 久), ⑤未定	歯科基礎学会, 歯科保存学会, 日本補綴歯科学会, 口腔外科学会, 日本矯正歯科学会, 口腔衛生学会, 理工	基礎の特別講演については10月時点で未定の記載で以降資料なし. 第11回FDIに戦後初出席後の報告, ヨーロッパ視察談. スライドの使用が始まる. 掛図と半々.
①歯牙疾患と全身病に就いて (パリ大学口腔外科教授デ・ショーム博士, 通訳: 日本歯科大学教授・山崎 清), ②唾液腺ホルモン (東京大学名誉教授・緒方知三郎)	歯科基礎学会, 歯科保存学会, 日本補綴歯科学会, 口腔外科学会, 日本矯正歯科学会, 口腔衛生学会, 理工	総会以外の会場についての資料なし. 日本歯科医師会学術会議→日本歯科医師会歯科医学会と改称. 議長から日本歯科医学会会長. 初の大坂開催.
各部代表講演 ①我が国における歯科補綴学の現状 (黒沢佐太郎), ②我が国における歯科保存学の現状 (尾形利二), ③我が国における口腔外科学の現状 (大井 清), ④我が国における歯科矯正学の現状 (岩垣 宏), ⑤我が国における歯科基礎学の現状 (松宮誠一), ⑥我が国における口腔衛生学の現状 (岡本清郷), ⑦我が国における歯科理工学の現状 (巖 真教) 特別講演 ①有床義歯について (山口秀雄), ②金属冠について (渡辺 梯), ③歯髄の保存療法について (関根永滋), ④歯槽膿漏症について (今川与曹), ⑤口腔外科領域における最近の2, 3の問題 (永井 巖), ⑥顎成形の骨移植について (佐藤伊古), ⑦咀嚼の能率を調べるには (横田成三), ⑧弗素塗布は何故齲蝕を予防するか (小早川庸造), ⑨極微の世界から見たエナメル質の構造について (矢尾太郎), ⑩衛生学からみた歯の減形成 (福島万寿雄), ⑪口腔の遺伝研究 (双生児における口腔所見補遺) (荷宮文夫), ⑫強度の大きな新しい陶歯について (末野悌六)	歯科基礎学会, 歯科保存学会, 日本補綴歯科学会, 口腔外科学会, 日本矯正歯科学会, 口腔衛生学会, 理工	第1回アジア歯科医学会合同開催. 初のテーブルクリニック開催. 歯科医師会会長 小椋善男, 歯科医学会会長 沖野節三. 「日本歯科医学会総会」での開催. 日本歯科医学会の名称は総会時のみの使用.
①日本における歯槽膿漏症に関する研究 (東京医科歯科大学教授・檜垣麟三), ②日本における弗素問題に関する研究 (京都大学教授・美濃口玄)	歯科基礎学会, 歯科保存学会, 日本補綴歯科学会, 口腔外科学会, 日本矯正歯科学会, 口腔衛生学会, 理工	
①癌の病理における2, 3の問題 (東京医科歯科大学教授・太田邦夫), ②癌の疫学 (公衆衛生院・平山 雄), ③口腔癌の診断 (東京医科歯科大学教授・上野 正), ④口腔癌の治療 (東京歯科大学・長尾喜景)	歯科基礎学会, 歯科保存学会, 日本補綴歯科学会, 口腔外科学会, 日本矯正歯科学会, 口腔衛生学会, 理工	
①口腔癌の診断と治療 (ハンブルグ大学教授・K・シューハルト), ②放射性物質と空気汚染 (国立公衆衛生院労働衛生学部長・鈴木武夫), ③老人病と老人歯科学 (東京医科歯科大学名誉教授・檜垣麟三)	歯科基礎医学会, 歯科保存口腔治療学会, 日本補綴歯科学会, 口腔外科学会, 日本矯正歯科学会, 口腔衛生学会, 日本歯科材料器械学会, 日本歯科放射線学会	昭和36年日本歯科医学会常置. 第9回総会は8分科会参加.
①歯科医学の国際的局面的いくつかについて (デンマーク王立歯科大学長・P.O. ピターゼン), ②現行憲法と社会保障 (大阪市立大名誉教授・恒藤 恭), ③日本における口腔外科の発達について (東京歯科大学教授・大井 清)	第5回歯科基礎医学会総会, 第10回歯科保存学会総会, 第47回日本補綴歯科学会, 第8回口腔外科学会総会, 第3回日本矯正歯科学会総会, 第12回口腔衛生学会総会, 第5回日本歯科器械学会, 第4回日本歯科放射線学会総会	日本歯科医師会60周年. 総会開催年の間隔は昭和28年~昭和38年は隔年, ~昭和44年は3年間隔, それ以降は4年間隔.

	開催期間	会頭（会長）	場所	テーマ	演題数
第11回 //	1966年 (昭和41年) 10/8, 9 (分科会は10, 11)	鈴木 勝 (会頭)	東京文化会館 上智会館（歯科基礎）、日本歯科医師会館（保存）、私学会館（補綴）、日本大学歯学部大学院（外科）、日本歯科大学（矯正）、日仏会館（衛生）、日本大学歯学部病院（材料、放射線）	専門分科会の集合体	総会特別講演4題、総会公演1題、総会シンポジウム4部（12題）、テーブルクリニック56題
第12回 //	1969年 (昭和44年) 10/10~13	白数美輝雄 (会頭)	大阪フェスティバルホール 朝日文化ホール（テーブルクリニック）、日本生命中之島研修所（歯科基礎、衛生）、関西電力ビルホール（保存）、大阪歯科大学（補綴、材料、小児）、大阪マーチャンダイズ・マート（外科）、大阪府歯科医師会館（矯正）、藤沢薬品ビル・7階ホール（放射線）	人類の進歩と調和	総会特別講演4題、総会シンポジウム2部（6題）、テーブルクリニック
第13回 //	1973年 (昭和48年) 9/22~26	中原 實 (会頭)	帝国ホテル 日比谷公会堂（総会シンポ）、東京医科歯科大学特別講堂（国際部会、放射線）、東京国際貿易センター（テーブルクリニック）、私学会館（歯科基礎）、農協ホール（補綴）、経団連会館（保存、歯周）、九段会館（外科）、野口英世記念会館（矯正）、東商ホール（衛生）、サンケイ会館（材料）、銀座ガスホール（小児）、千代田公会堂（麻酔）、岩波ホール（理工）	未来への歯学と歯科医療の調和	総会特別講演5題、総会シンポジウム2部（17題）、国際部会2部（8題）テーブルクリニック71題
第14回 //	1977年 (昭和52年) 10/15~18	関根永滋 (会頭)	日本武道館（開会式、開会講演）、千代田区公会堂（総会講演）、九段会館（総会講演、総会シンポ）、日比谷公会堂（総会シンポ、特別シンポ、閉会講演、閉会式）、経団連ホール（国際講演、国際シンポ）、科学技術館（総会テーブルクリニック、総会視聴覚）	歯学の進歩と人類の福祉	開会講演2題、総会講演6題、総会シンポジウム3部（14題）、国際講演2題、国際シンポジウム1部（5題）、総会テーブルクリニック65題、特別講演8題、特別シンポジウム2部（11題）、閉会講演1題
第15回 //	1983年 (昭和58年) 10/15~18	白数美輝雄 (会頭)	日本武道館（開会式）、ホテルニューオータニ	長寿のための歯学	ジャパン・プログラムI（8題、特別講演1題）、ジャパン・プログラムII（5題）、ジャパン・プログラムIII（2テーマ11題）、メイン・テーマI（5題）、メイン・テーマII（5題）、メイン・テーマIII（5題）、FDI常設委員会オープン・セッション（2セッション12題）、FDI関連団体シンポジウム（3シンポジウム25題）、ディフェンスフォース・デンタルプログラム（1題）、自由研究発表（122題）、テーブル・デモンストレーション（37題）

総会講演詳細	分科会	備考
<p>①米国歯科医師会 (ADA) とその活動 (米国歯科医師会事務総長・ハロルド・ヒレンブランド), ②歯牙硬組織破壊 (カルフォニア大学歯学部長兼口腔生物学教授・ライダー・F・ソグネス), ③わが国における歯科補綴学の発達史 (東京医科歯科大学・中沢 勇), ④食欲と咀嚼の神経生理学的研究 (慶応大学名誉教授・林 謙)</p>	<p>第 8 回歯科基礎医学会総会, 第 13 回歯科保存学会総会, 第 13 回日本補綴歯科学会総会, 第 11 回口腔外科学会総会, 1966 年度日本矯正歯科学会総会, 第 15 回口腔衛生学会総会, 第 18 回日本歯科材料器械学会総会, 第 7 回日本歯科放射線学会総会</p>	<p>抄録では日本補綴歯科学会については 13 回総会の記載になっていたが正否不明。英語部会の開催開始, 皇太子来会。</p>
<p>①このごろ思うこと一いま大切なことは— (松下電器産業株式会社社長・松下幸之助), ②ほうろう質の構造と組成に関する最近の知見 (ウェスタンリザーブ大学教授・David B. Scott), ③日本における歯科保存学の歴史 (日本歯科大学教授・岡村治明), ④修復材料の選定使用における理工学的生物学的考慮 (インディアナ大学歯科理工学教授・R. W. Phillips)</p>	<p>第 11 回歯科基礎医学会総会, 第 16 回歯科保存学会総会, 第 56 回日本補綴歯科学会総会, 第 14 回口腔外科学会総会, 第 28 回日本矯正歯科学会総会, 第 18 回口腔衛生学会総会, 第 23 回日本歯科材料器械学会総会, 第 10 回日本歯科放射線学会総会, 第 7 回日本小児歯科学会総会</p>	<p>テーブルクリニック演題数の資料なし</p>
<p>①近代病 (成人病, その他) の成因に関する私見とその対策 (東京大学・沖中重雄), ② The Future of Dentistry as a Public Health Service 社会のために歯科医療はこう変わってゆく (FDI 専務理事・Dr. G. H. Leatherman), ③未来の補綴 (東京医科歯科大学・林 都志夫), ④これからの歯学—虫歯の基礎研究の現状と未来への展望— (東北大学教授・国立予防衛生研究所歯科衛生部長・荒谷真平), ⑤わが国の歯学発展の回顧と展望 (日本大学総長・鈴木 勝)</p>	<p>第 15 回歯科基礎医学会総会, 第 20 回歯科保存学会総会, 第 60 回日本補綴歯科学会総会, 第 18 回口腔外科学会総会, 第 32 回日本矯正歯科学会総会, 第 22 回口腔衛生学会総会, 第 27 回日本歯科材料器械学会総会, 第 14 回日本歯科放射線学会総会, 昭和 48 年度日本小児歯科学会総会, 第 16 回日本歯周病学会総会, 第 1 回日本歯科麻酔学会総会, 第 25 回歯科理工学会総会</p>	
<p>①予防歯科学の新思潮 (国際歯科連盟会長・Maynard K. Hine), ②日本人の反対咬合 (岩手医科大学・石川富士郎), ③抗菌性抗生物質および制癌剤療法に関する問題点について (鶴見大学・藤田 浩), ④小児のう蝕抑制について (岐阜歯科大学・吉田定宏), ⑤歯科医学と免疫学 (城西歯科大学・片山有夫), ⑥われわれ歯科医師は兎唇・口蓋裂にどのようにとりくむべきか (九州歯科大学・池尻 茂)</p>		<p>歯科医師会全会員の会員化の機構改革後初, 分科会併催についての資料なし (以下同)</p>
<p>ジャパン・プログラム I : これからの診断と治療—歯科領域における ME 機器の応用— ①歯科治療時における全身状態把握に対する ME 機器の応用 (鶴見大学・雨宮義弘), ②咬合治療の効果と咬合音診断 (新潟大学・原 耕二), ③下顎運動における 3 次元解析の試み (新潟大学・石岡 靖), ④レーザーによる口腔疾患治療の基礎と臨床 (日本歯科大学・古本啓一), ⑤ ME 機器を使用する人の問題点とその解決法 (岐阜歯科大学・船越正也), ⑥コンピュータの補助による不正咬合患者の口腔・顔面の形態と機能の診断, ⑦モアレ等高線自動解析による顔面形態の 3 次元評価, ⑧保存治療における ME 機器 (東京医科歯科大学・砂田今男), 特別講演: 計測と制御の医学 (大阪大学・阿部 裕)</p> <p>ジャパン・プログラム II : 歯科診療の発達と最近の動向 ①わが国の歯科保健状態の動向 (鶴見大学・北村中也), ②幼若大臼歯の保存修復処置 (鶴見大学・大森郁朗), ③チタンおよびチタン合金の歯科領域における利用について (京都大学・井田一夫), ④日本における木床義歯の歴史 (東京歯科大学・長谷川正康), ⑤最近の歯科医療環境の変遷に伴う歯科医の意識調査および対応 (東京都新宿区開業・落合靖一)</p> <p>ジャパン・プログラム III : 歯科臨床における環境の衛生管理 テーマ 1 : 歯科治療室における麻酔ガス汚染対策 ①はじめに (東京医科歯科大学・久保田康郎), ②笑気汚染の現況 (東北歯科大学・高北義彦), ③笑気汚染の実態調査 (神奈川歯科大学・星谷昭三), ④歯科治療室における室内換気効果 (昭和エンジニアリング株式会社・富田 稔), ⑤臨床における笑気汚染の防止策 (東京医科歯科大学・海野雅浩), ⑥まとめ (日本歯科大学・古屋英毅)</p> <p>テーマ 2 : 歯科診療における B 型肝炎感染防止対策の実際 ①はじめに (東京歯科大学・高添一郎), ②歯科医師への感染防止 (日本大学・森本 基), ③患者への診断とその取り扱い (東京医科歯科大学・古橋正吉), ④臨床における器具・器材への滅菌・消毒法 (日本歯科大学・久野吉雄), ⑤まとめ (東京歯科大学・高添一郎)</p> <p>メイン・テーマ I : 歯を長持ちさせることの意義 ①歯を長持ちさせることの意義 (日本歯科大学・須賀昭一), ②歯は生涯持つはずのものである (Helsinki 大学・Anja Ainamo), ③加齢, 歯の喪失および補綴処置と咀嚼能率 (Göteborg 大学・Gunnar E. Carlsson), ④歯の喪失が食事の好みや栄養に及ぼす影響 (Harvard 大学・Howard H. Chauncey), ⑤歯を長持ちさせたいと思わせるには? 夢と現実 (Paris 大学・Micheline Ruel-Kellermann)</p> <p>メイン・テーマ II : 歯を長持ちさせるための予防法 ①歯を長持ちさせるための予防法 (九州大学・中田 稔), ②人口過剰な工業地域における若年者の総合的口腔保健プログラム (Karl Marx 大学・W. Künzel), ③発展途上国における口腔疾患予防法 (Sri Lank 保健教育省・K.D.G. Saparamadu), ④個人, 集団および地域社会に対応する予防方法のあり方 (医療セミナー・コンサルタント会社経営 (アメリカ)・Jack B. Silversin), ⑤ワクチンによる歯科疾患抑制の未来像 (Guy' s hospital medical and dental schools・J.M.A. Wilton)</p> <p>メイン・テーマ III : 歯を長持ちさせるための臨床歯学 ①歯を長持ちさせるための臨床歯学 (日本大学・斎藤 毅), ②生物学的診断法によるむし歯の最小限切除治療法 (東京医科歯科大学・細田裕康), ③正しい歯内療法—歯を長持ちさせる基礎— (Australia 歯内療法学会会長・B. Feiglin), ④簡易歯周診査法—WHO 要治療指数の活用— (New Zealand 歯科医師会歯科保健委員長・Lawrence J.Croxson), ⑤長期観察からみた補綴学の最近の進歩 (Berlin 大学・F.K.W. Eichner)</p>		<p>第 71 回 FDI 年次世界歯学大会との併催 (東洋初) FDI に合致させるため開催間隔を 2 年延長</p>

	開催期間	会頭（会長）	場所	テーマ	演題数
第16回 //	1987年 (昭和62年) 10/3～5	佐藤三樹雄	ホテルニューオータニ	新しい世紀の歯科医療を求めて	開会講演2題, 総会講演10題, シンポジウム4部(25題), テーブルクリニック65題, ポスター・セッション39題
第17回 //	1991年 (平成3年) 10/26～28	森 政和	ロイヤルホテル (大阪)	科学と心の歯科医療を求めて—発展と調和—	開会講演2題, 総会講演8題, シンポジウム4部(16題), 国際セッション3部(10題), テーブルクリニック35題, ポスター・セッション96題
第18回 //	1995年 (平成7年) 11/25～27	中原 泉	帝国ホテル	デンタル・オリンピア'95—21世紀の歯科医療	開会講演3題, 総会講演8題, シンポジウム4部(15題), 国際セッション3部(10題), テーブルクリニック36題, ポスター・セッション120題, 特別企画シンポジウム・阪神・淡路大震災から得たもの(10題)
第19回 //	2000年 (平成12年) 5/27～29	石川達也	東京国際フォーラム	歯科医学と健康の創造	開会講演1題, 総会講演8題, シンポジウム8部(44題), 国際セッション—講演(4題), 国際セッション—シンポジウム(6部35題), テーブルクリニック62題, ポスター・セッション143題
第20回 //	2004年 (平成16年) 10/29～31	江藤一洋	パシフィコ横浜	健康な心と身体は口腔から—発 ヨコハマ2004—	会頭講演, 開会講演1題, 総会講演10題, シンポジウム17部(69題), ランチョンセミナー7題, サテライトシンポジウム4題, 国際セッション—講演(3題), 国際セッション—シンポジウム(3部12題), テーブルクリニック75題, ポスター・セッション426題
第21回 //	2008年 (平成20年) 11/14～11/16	大塚吉兵衛	パシフィコ横浜	めざせ! 健・口・美—未来に向けた歯科医療—	開会講演1題, 総会講演10題, シンポジウム16部(61題), 歯科技工士・歯科衛生士セッション2部(4題), 国際セッション—講演(1題), 国際セッション—シンポジウム(4部12題), ランチョンセミナー10題, サテライトシンポジウム2部(4題), テーブルクリニック62題, ポスター・セッション410題
第22回 //	2012年 (平成24年) 11/9～11/11	川添堯彬	大阪国際会議場	お口の健康 全身元気 —各世代の最新歯科医療—	総会講演10題, シンポジウム16部(61題), 歯科技工士セッション1部(3題)・歯科衛生士セッション1部(4題), 国際セッション—講演(1題), 国際セッション—シンポジウム(4部10題), ランチョンセミナー11題, サテライトシンポジウム2部(7題), テーブルクリニック47題, ポスター・セッション458題, 分科会プログラム22部(100題, 3シンポジウム含む)
第23回 //	2016年 (平成28年) 10/21～10/23	水田祥代	福岡国際会議場, 福岡サンパレス	歯科医療 未来と夢 (New Paradigm for Dental Medicine : Its Futures and Our Dreams)	講演10題, シンポジウム13部(49題), 国際セッションA(講演1題, シンポジウム4部12題), 国際セッションB(講演1題3演者, シンポジウム4部11題), ランチョンセミナー29題, サテライトシンポジウム2部(7題), テーブルクリニック47題, ポスター・セッション422題, 日本歯科医師会プログラム2部, 分科会プログラム9部(27題)

総会講演詳細	分科会	備考
①口腔疾患の動向(愛知学院大学・榊原悠紀田郎), ②米国の歯科医師生涯教育の現状と問題点—生涯教育による口腔の健康改善—(テキサス大学・Don L. Allen), ③エイズ最新情報—口腔内発現, 管理, 予防対策—(カリフォルニア大学・Sol Silverman, Jr.), ④歯科医療と患者心理(東京医科大学・内田安信), ⑤老化と疾患(東京大学・折茂 肇), ⑥小児齲蝕の推移と小児の歯科医療(鶴見大学・大森郁朗), ⑦歯科口腔外科の軌跡—その歴史的考察—(日本歯科大学新潟歯学部・中原 泉), ⑧歯周疾患の診断システムの確立(新潟大学・原耕二), ⑨顎・顔面領域の疼痛管理—ペインクリニックの立場より—(大阪歯科大学・上田裕), ⑩口腔腫瘍の発症, 診断より治療まで—日本における現状と展望—(大分医科大学・清水正嗣)		
①レーザー歯学 最近の進歩(九州大学・盛岡俊夫), ②法歯学と犯罪捜査(東京歯科大学・鈴木和男), ③史料に基づくわが国の歯科医学史(日本大学松戸歯学部・谷津三雄), ④噛むことの大切さ—その生化学的意義(神奈川歯科大学・斎藤 滋), ⑤歯周組織の再生(日本歯科大学・鴨井久一), ⑥医療事故と医師—歯科医師の責任(日本大学・竹井哲司), ⑦口腔癌の早期発見と歯科医師の責務(札幌医科大学・小浜源郁), ⑧歯内療法—難症例への対応(大阪歯科大学・戸田忠夫)		
①小児の歯の外傷(東京医科歯科大学・小野博志), ②金属アレルギー(長崎大学・藤井弘之), ③最先端画像診断技術とその診断寄与(九州大学・神田重信), ④可視光線照射器の性能低下とそのチェック法(日本大学・小野瀬英雄), ⑤歯周治療のSPT(日本大学・村井正大), ⑥磁気の補綴的应用(愛知学院大学・田中貴信), ⑦地域の保健と在宅老人歯科医療(大阪大学医学部・新庄文明), ⑧包括歯科医療における矯正治療(新潟大学・花田晃治)		
①ドライマウスとドライアイ(東京歯科大学眼科・坪田一男), ②食の科学, 味覚と咬合(大阪大学・山本 隆), ③遺伝子治療の現状と未来(日本医科大学・島田 隆), ④顎関節症—診断と治療に関する最近の考え方—(東北大学・渡邊 誠), ⑤スポーツ歯学—21世紀に向けて—(東京歯科大学・石上恵一), ⑥心療歯科—病態の理解と治療—(北里大学・宮岡等), ⑦画像診断の現状と未来(東京医科歯科大学・佐々木武仁), ⑧8020 データベースとその構築(国立健康・栄養研究所名誉所員, 和洋女子大学健康栄養学科・小林修平)		第22回アジア太平洋歯科大会(5/25~30) 併催
①鉄は「犬」, 銅は「猫」(東京藝術大学・宮田亮平), ②咬み合わせに関する最新情報(東北大学・渡邊 誠), ③骨を科学する(埼玉医科大学・須田立雄), ④21世紀の歯科医療(東京医科大学・上田 実), ⑤歯周病と喫煙(脱タバコ横浜宣言に向けて)(大阪大学・粟石聰), ⑥口臭—その診断・予防・カウンセリング・治療—(新潟大学・宮崎秀夫), ⑦睡眠時無呼吸症候群と歯科の役割(愛知医科大学・山田史郎), ⑧聴くことは疲れるが, でも聴かねばならない—聴くことの意味—(大阪大学・鷺田清一), ⑨歯科臨床でレーザーをどう使うか—歯科用レーザーの歩みから検討する—(埼玉県川口市開業・篠木 毅), ⑩歯科治療中における外観サポート(フェイシャルセラピスト・かづきれいこ)		
①IT化に向けて(国際医療福祉大学・開原成允), ②ハンセン病の歯科(国立療養所多摩全生園・宇野公男), ③歯科医院からの禁煙支援(日本大学・尾崎哲則), ④口中医柱助の活躍—口中医柱助誕生秘話—(作家・和田はつ子), ⑤プリオン説はほんとうか?(青山学院大学・福岡伸一), ⑥口臭の診断と治療(東京医科歯科大学・川口陽子), ⑦スポーツ歯科医による健康増進(東京歯科大学・武田友孝), ⑧口腔筋機能療法(MFT)を応用した構音訓練(昭和大学・山下夕香里, 東京都開業・高橋未哉子), ⑨ビスフォスフォネート投与患者は歯科治療により顎骨壊死を起こす可能性がある(大阪医科大学・島原政司), ⑩3DCTの有用性(日本大学・新井嘉則)		
①口腔から全身が見える:よくわかる歯周病菌抗体法(座長:日本大学・伊藤公一, 講師:岡山大学・高柴正悟), ②産学協同による歯科補綴用機器開発プロジェクト—口腔機能の改善を目指して—(座長:大阪歯科大学・田中昌博, 講師:東北大学・佐々木啓一), ③最新!ビスフォスフォネート関連顎骨壊死の臨床(座長:大阪歯科大学・池尾 隆, 講師:兵庫医科大学・岸本裕充), ④医療情報の標準化を目指して(座長:昭和大学・岡野友宏, 講師:大阪大学・玉川裕夫), ⑤「噛む, 食べる」という行動と健康—歯科疫学と栄養疫学との視点から—(座長:大阪歯科大学・小正 裕, 講師:東京大学・佐々木 敏), ⑥東日本大震災における宮城県の身元確認活動(座長:神戸常盤大学・足立了平, 宮城県歯科医師会・江澤庸博), ⑦シリコニアを活かしたメタルフリーレストレーション最新事情(座長:明海大学・中島裕, 講師:愛知学院大学・伴 清治), ⑧脳と咀嚼(座長:岡山大学・皆木省吾, 講師:東京医科歯科大学・泰羅雅登), ⑨ライフステージに応じた歯内療法—歯の長期保存のためのスタンダードを考える—(座長:大阪歯科大学・林 宏行, 講師:新潟大学・興地隆史), ⑩歯冠修復と欠損補綴における接着材料の効果的な応用法—接着ブリッジに見る接着臨床—(座長:日本大学・松村英雄, 講師:鹿児島大学・田中卓男)		
①関節軟骨の再生医療(広島大学・越智光夫), ②長寿時代の臨床死生学(東京大学・会田薫子), ③変わりゆく歯内療法—超高齢社会への対応—(東京医科歯科大学・興地隆史), ④歯科医療における画像検査の現在・過去・未来(日本大学松戸歯学部・金田 隆), ⑤EBMと診療ガイドライン(国際医療福祉大学・吉田雅博), ⑥認知症の症候学と食行動異常(大阪大学・池田 学), ⑦最新!骨吸収抑制薬関連顎骨壊死の予防・治療(兵庫医科大学・岸本裕充), ⑧口腔顔面痛の臨床診断推論(慶應義塾大学・和嶋浩一), ⑨これからの障害者歯科医療と地域医療(福岡県開業, 九州歯科大学臨床教授・緒方克也), ⑩異分野融合が導いたコメ型経口ワクチン MucoRice の開発(東京大学・岸川咲史, 清野 宏)		



日齒會學術大會は分散

日本齒科醫師會では本年度における學術大會は會員の便宜の關係から各地域の要望で、各ブロック毎に分散開催することを決定し、地域毎に協議する方針をとつた

決定したものは近畿は大阪市で十月、中国は宮島で十一月、四國は道後温泉で十一月、九州は福岡市で十一月、北陸は金澤市で十月、北海道東北は仙臺市で十一月に開く

写真8 当時のニュースから〔歯界展望 1948；5(16)：549〕

トピックス

青木貞亮について

青木貞亮 略歴 榊原悠紀田郎. 続歯記列伝. クインテッセンス出版；2005. p.16-8.

「歯科レントゲン 歯科補綴 学校歯科 国鉄嘱託医など多彩な道を地味に歩んだ人」の見出しで

「・・・新しく発足した学術会議の議長は会長が指名することになっていたが、最初の社団法人日本歯科医師会長になった佐藤運雄は青木貞亮を指名した。

しかしこのとき、青木貞亮はすでに歯科医学教育の教職や学会長などもやめて久しくなっていて、いわゆる全くの無冠の立場であったから、この指名は異例のこととも思われた。しかし、実はこれは佐藤運雄の熟慮の指名であった、というは佐藤運雄が貞亮の学会活動に対する大きな調整能力を知っていたことだったのである。

敗戦のころ、日本には歯科界を代表すると思われる3つの流れがあった。

1つは1902年（明治35年）（ママ）に発足した『日本歯科医学会』の流れをくんだ『大日本歯科医学会』で、これはFDIなどにも参加していた。2つ目は1917年（大正6年）に中原市五郎によって日本歯科医専門関係者を中心に設立され、分科会制なども取り入れた『日本歯科学会』、3つ目は1918年（大正7年）に東大医学部の石原久によって設立された医学部関係者を中心にした『日本歯科口腔科学会』であり、これが日本医学会の分科会となっていた。

因みに日本医学会総会には、1906年（明治39年）の第2回日本医学会総会のときから日本歯科医学会が参加していたが、大正6～7年にかけて今述べた2つの学会が名乗りを上げて、日本医学会総会参加をめぐる鼎立の形となってトラブルが起こった。これはその後も尾を引いていたが、1926年（大正15年）東京帝国大学医学部を主宰して第7回日本医学会総会が開催されたとき、3つの学会の共同開催ということになった。

しかしその実現のための調整にはきわめて難しい問題が山積みしていたが、そのとき日本歯科医学会の副会長をしていた青木貞亮が積極的に斡旋に努めて、共同参加をまとめ上げた。これは当時の関係者に深く印象に残ったことであった。

これが新しく発足した日本歯科医師会・学術会議議長に佐藤運雄が青木貞亮を指名した理由であったと思われる。実際にこの学術会議によって1949年（昭和24年）11月に総合歯科医学大会が開催され、これが第1回日本歯科医学会総会となり、以後続けられている。（中略）

青木貞亮の略歴については、1893年（明治26年）に長野県平野村（岡谷市）生まれ。同郷の中原市五郎を知って日本歯科医専に進学。中原實、後藤京平などの一期後輩。卒業後、シカゴのロヨラ大学歯学部ポストグラジュートコースで補綴学、レントゲン学を習得し、1916年（大正5年）7月に帰国とともに母校に戻り、補綴学教授になった。日本補綴歯科学会会長を1932年（昭和7年）から1938年（昭和13年）まで務めている。1923年（大正12年）には国鉄の嘱託歯科医の役を受け、嘱託医との連携を図るなど多彩な活動を、地道にこなしていたという。」

この記載から、戦後の新制歯科医師会において学術会議の議長には最適な人物であったのであろう。なお、昭和20年以降、社団法人日本歯科医師会定款によって「日本歯科医学会」が正式呼称となるのは昭和32年（1957）である。

4. 昭和49年（1974）の機構改革

昭和49年（1974）4月1日に施行された日本歯科医学会規則によると、日本歯科医師会の定款73条に基づき、日本歯科医学会が規定された。そして、第2章「学会会員」の項が大きく変わった。会員は「一般会員」（日本歯科医師会会員）と「専門分科会会員」の2つになったことで、わが国の歯科医師のほとんどが会員となったことになる（表5）。

この点について、「・・・この総会は日本歯科医師会員のすべてを学会員として行われる最初の学術大会で、名実共に、日本の歯学、歯科医療にたずさわる者の学術研修のための総会集会であるところに画期的な特色がある。・・・従来は参加した者のみが事実上の総会構成員であったが今回からは学会員すべてが構成員である。・・・学会が経常費を持ち、学術大会のために前渡金を準備することができるようになった。こうなると、会頭は適所に適材をあてて、心おきなく総会の企画、次準備、運営に当たることが可能である。会頭所属の大学に全く負担をかけないということはできないとしても、従来よりも、気楽に会頭を引きうけて頂き、効率よく大会会務をこ

表5 日本歯科医師会および日本医師会の定款における日本歯科医学会および日本医学会

公益社団法人日本歯科医師会	公益社団法人日本医師会
<p>第8章 会計および財産 (学 会) 第43条 本会に日本歯科医学会(以下「学会」という.)を置く。 2 学会は、歯科医学に関する科学および技術の研究並びにこれに関する事業を行う。 3 学会の構成、役員、委員および事業その他に必要な事柄は、別に規程で定める。</p> <p>日本歯科医学会規程 より 第2章 学会会員 (学会会員) 第3条 学会は、日本歯科医師会の会員と、学会の機能をより充実させるために、日本歯科医師会が加入・登録を承認した次の二種の団体の会員から構成される。 一 専門分科会会員 二 認定分科会会員 2 専門分科会、認定分科会の定義は、第5章及び第6章にて定める。 3 学会の活動において、日本歯科医師会会員並びに専門分科会及び認定分科会の各々の会員を、学会会員と称する。</p> <p>附 則 この定款は、平成26年4月1日から施行する。</p>	<p>第8章日本医学会 (学 会) 第48条 本会に、日本医学会(以下「学会」という.)を置く。 (構 成) 第49条 学会は、各分科会をもって構成する。 2 分科会は、別に定めるところにより、医学の各専門分野に応じて、区分する。 (目 的) 第50条 学会は、医学に関する科学及び技術の研究促進を図り、医学及び医療の水準の向上に寄与することを目的とする。 (事 業) 第51条 学会は、前条の目的を達成するため、次の各号に掲げる事業を行う。 (1) 日本医学会総会の開催 (2) 日本医学会シンポジウムの開催 (3) 医学及び医療に関する情報の収集と伝達 (4) その他学会の目的構成上必要な事業 2 学会が前項の事業を行う場合には、本会会員及び各分科会会員は、これに参加することができる。 (学会に関する規則) 第52条 学会に関する必要な規則は、学会の提案に基づき、代議員会の決議を経て、別に定める。</p> <p>附 則 (施行期日) この定款は、平成26年4月1日から施行する。</p>

なして頂くことは可能であろう。」さらに追加して「・・・従来東京と地方との交互関係の慣例を破って、第13回に続いて東京で開催されることになった。」(林都志夫、日本歯科医学会(学術大会)準備から開幕まで一、日本歯科医学会会報1975;2:4-5)とあり、東京と地方の交互開催を裏付ける資料でもある。

日本歯科医学会会報第1号(1975)に日本歯科医学会会長白数美輝雄「新発足の日本歯科医学会」と日本歯科医師会会長中原 實「会報発刊を祝す」を以下に記載する。

「まずはじめに、このたびの日本歯科医師会定款改正により、日本歯科医師会会員の全員を一般会員としてお迎えできたことを、みなさんと共に喜び申し上げたいと存じます。これによって、日本の歯科医師の総員参加による文字通りの日本歯科医学会が発足し、歯学の本来のあり方、歯科医師の歯科医療に対する基本的なとりくみ方が示されたこととなります。

このような学会のあり方は、これまで、本邦はいうまでもなく、世界にも例をみないものであります。それだけに、今後の本学会の運営・活動については、広く世の注目を浴びるでありましょう。

この時期に応え、われわれの学会を世界にも誇り得るものとするためには、学会員全体とくに一般会員の方の積極的な研究活動への参加をお願いしなければなりません。

もともと、研究活動は地味な性格のものであり、歯科医療も個々の治療行為を積み上げて、患者の喜びを術者の喜びとする秘かな性質のものであります。しかし、このような地味な奉仕の努力こそ、現代の日本にとって、最も大切なことではないでしょうか。

さし当たって私に課せられた最大の仕事は、この新しい日本歯科医学会の運営を新しい軌道にのせることと、昭和52年に予定されている第14回日本歯科医学会総会(学術大会)を実り多きものとするということであると自覚しておりますが、ここに学会員のみなさまの絶大なるご支援とご鞭撻をお願いするしだいでございます。」(白数美輝雄)

続いて、「日本歯科医学会の機構が改められた結果、日本歯科医師会会員が即『学会員』として、歯科医学の発展に直接参加し得るようになったことは、歯科界のために誠に喜ばしいことであります。(中略)・・・ 歯科医師のすべてが日本歯科医学会会員となり、最新の歯科医学を身近に感じ得るようになったことは、臨床と学問を結ぶ端緒となり、医療に大いなる進展をもたらし、それが日本歯科会の体制の強化につながるものであることは云うまでもないことでしょう。

今回、日本歯科医学会が行った機構改革の持つ意義は極めて大きく、日本歯科医師会としては、その機能と目的の増進であったと云えるのです。・・・」(中原 實)

さらに、機構改革初の第14回日本歯科医学会総会における会長挨拶においても、大きく触れられている。以下にその概要を記す。

「本日、第14回日本歯科医学会総会が『歯学の進歩を人類の福祉へ』を基調テーマに掲げ、皇居を臨む日本武道館を中心に、雄渾な規模と充実した内容で盛大に開催されますことはまことに喜ばしく、ご同慶にたえません。

(中略)・・・昭和49年4月から日本歯科医学会が改組され、日本歯科医師会の全会員を学会会員として迎えることになり、長い間歯科界が抱えていた臨学一体の理想が現実のものとなったわけであります。したがって、この第14回学会総会は、日歯会員全員が学会会員とあらはれてはじめての総会であり、日本歯科医学会史に大きく記されるべき総会であると存じます。・・・」(白数美輝雄)

臨学一体という言葉が使用されたはしりであり、文字通り臨床家と研究者との調和がとれた瞬間でもあった。

戦後の歯科医学会を新しい歯科医学会としてとらえたとき、歯科医師会の学術会議から昭和35年(1960)に日本歯科医学会が常置され、各分科会(7分科会: 歯科基礎医学会、日本歯科保存学会、日本補綴歯科学会、日本口腔外科学会、日本矯正歯科学会、口腔衛生学会、日本歯科材料器械学会)をもって構成される、現在のような日本歯科医学会の機構に至っていることになる。それまでは歯科医学会は総会開催のときのみの名称であった。各分科会から1名の評議員が選出され、重要案件の会務の執行が行われた。当時の評議員会は現在の評議員

会と理事会の2つの機能をもっていたことになる。

なお、総会は昭和44年（1969）までは3年に1回、以後は4年に1回の開催となっている。昭和49年（1974）にいわば新生「日本歯科医学会」が誕生し、現在のような機構組織になったといえる。また、令和3年（2021）の第24回日本歯科医学会総会は「学術大会」のみの標記になり、いくつかの分科会および地区歯科医学会との併催となっている。歯科医学会本来の企図になったことは喜ばしいことである。

なお、分科会の数は次第に増加し、昭和49年（1974）には14分科会を数えていたが、「認定分科会」制度が平成19年（2007）から施行され、令和3年（2021）4月現在、専門分科会25、認定分科会20となっている。

まとめ

日本歯科医学会のあゆみについて一次資料「日本歯科医学会沿革概要」（大正12年刊）をもとに調査した。

「日本歯科医学会」という呼称は明治36年11月27日以降（月日不詳）に使用された。この明治36年を歯科医学会の発祥の年にしたい。それ以降、大正期から昭和20年までは、「年次大会」の形式で行われてきた。一方、医科を意識しながら日本医学会の歯科分科会として参画してきた学会は、昭和17年の第12回日本医学会からは歯科医学会ではなく「口腔科学会」が母体となり分科会として参加している。

昭和20年の敗戦後はGHQの指導によって、日本歯科医師会学術会議でスタートするのが昭和24年である。歯科医学の分科会形式をとりながら当初7分科会から拡大してきた。昭和32年に「歯科医学会」から「日本歯科医学会」と改称した。その後、昭和49年（1974）4月に機構改革が行われ、日本歯科医学会の会員は歯科医師会会員と分科会会員の両方で構成されることとなった。

日本歯科医学会の母体は近代歯科医学が導入されて間もない頃から始まっていることをあらためて認識し、先人の苦勞と見識の広さに感服するとともに、今後の日本歯科医学会の発展を期待したい。

第2部

第24回日本歯科医学会学術大会座談会

学術大会のニューノーマル

於 日本歯科医師会館

2021年7月9日



住友雅人



第24回日本歯科医学学術大会会頭
日本歯科医学会会長

中原 泉



第18回日本歯科医学会総会会頭
日本歯科医史学会理事
日本歯科大学理事

松村英雄



第24回日本歯科医学会学術大会準備委員長
日本歯科医学会副会長
日本大学歯学部教授

小林隆太郎



第24回日本歯科医学会学術大会事務局長
日本歯科医学会総務理事
日本歯科大学東京短期大学学長

司会：渋谷 鑛



日本歯科医史学会理事
日本大学客員教授

総会から学術大会への変貌

第 18 回日本歯科医学会総会会頭

日本歯科医史学会理事

日本歯科大学理事長

中原 泉

■ コロナが来襲した

座談会でも述べましたが、私は、第 18 回日本歯科医学会総会を主管しました。この総会は、オリンピックと同じく 4 年ごとに開催することから、メインテーマを、「デンタル・オリンピア'95」としました。副テーマは、次世紀まで 5 年でしたので、「21 世紀の歯科医療」としました。オリンピックとは関係ない / 21 世紀は第 19 回を先取りした、と不評でした。

このたびの第 24 回は、東京五輪の開催年と重なったため、学会は早々に 1 年延期を決定しました。ところが、まったく想定外の新型コロナウイルス感染症が襲来し、五輪も 1 年延期されてしまいました。

1920 年のアントワープ五輪の時、スペイン風邪が猛威をふるったそうです。それから 100 年後に、パンデミック感染症は再びオリンピックを容赦なく直撃したのです。学会は、コロナに対応して総会のプランを根本から見直さざるを得ない事態になりました。

■ 個性派の住友学会長

私は、住友雅人学会長とは長い付き合いです。彼が優れたアイデアマンであり、巧みなオルガナイザーであり、駄ジャレのアジテーターであることを知っています。秀でた有言実行の人であります。彼を中核として有能な役員の方々が、総会を従来とは異なるスタイルに改革することを試みました。

それは、前回まで歯科大学が主幹校となっていた総会を、学会長を会頭として、日本歯科医師会と日本歯科医学会が主体性をもって主催するように抜本的に改めました。傘下の専門分科会・認定分科会と各地区歯科医師会が参画し、さらに学会の関連団体の日本歯科医学会連合と連携し、併せて専門分科会や認定分科会を併催します。一般演題はすべてポスター発表とし、他のプログラムは公募することとしました。

■ 総会から学術大会へ

これに伴って、従来の総会の名称を、学術団体の集まりという性格をよりの確に表現する「学術大会」に改称したのです。今回のメインテーマは、「逆転の発想—歯科界 2040 年への挑戦」と謳い、20 年後の近未来に向けて、歯科の創生というイノベーションのロードマップを描きました。それは、今後の 20 年を第 1 期から 3 期に分けて、健康寿命の延伸をパワーアップさせる、という深遠なプランでした。

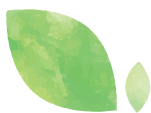
前後しますが、それが昨年 1 月、コロナという兇悪な伏兵の奇襲に、学会も全面的なコロナ対応を迫られたのです。学術大会の改革の基本は変えず、コロナの状況により現場開催とオンライン開催を併用する方式の検討を余儀なくされました。しかしながら、最終的に開催形式は、予測できないコロナに左右されずに大会準備を進められる全オンラインを決断しました。あくまで、コロナに関わりなく、9 月 23 日から 25 日にライブ配信、26 日から 10 月 31 日までオンデマンド配信としました。これにより会員は、全プログラムを視聴できることになりました。

■ ニューノーマルの命題

このように、図らずもコロナ対策をきっかけにして、学術大会は自他共に転機を迎えました。住友学会長の学術大会の革新的なニューノーマル（新様式）が、一挙に促進されたといつてよいでしょう。

私共は、コロナ下においてオンラインの利便性を知り、現場・対面の愛しさを味わいました。必ず戻ってくるコロナ後の世界に、私共はどのように対処したらよいのか。オンライン方式の短所が、現場と対面の臨場感の欠如にあることは分かっています。残念ながら、それは私共の活動の充足感を満たしてはくれません。20 年後までに学術大会は 5 回を数えます。学会は、コロナの最中から、ニューノーマルを如何に実現するか、という命題を課せられているのです。

過去を見ながら 未来へ進む



渋谷 2021年9月23日から10月31日まで(LIVE配信:9月23日~25日, オンデマンド配信:9月26日~10月31日), 第24回日本歯科医学会学術大会が開催されます。今回, その記念出版物として, 「日本歯科医学会のあゆみ」(第1部, 4頁)をまとめることになり, その一環として座談会を企画しました。

今大会のテーマは「逆転の発想 歯科界2040年への挑戦」です。それを実現するためには, 「あゆみ」によって“過去”を振り返りながら, それだけにとどまらず, 歯科界にイノベーションを起こす“未来”について話し合う必要があると思います。

住友 第24回日本歯科医学会学術大会が指すものを端的に表しているのは, 大会ポスターだと思えます(図1)。

ポスターのメビウスの輪の左下にボートが描かれています。フランスの哲学者ポール・ヴァレリーは, 「湖に浮かべたボートをこぐように, 人は後ろ向きに未来へ入っていく」という言葉を残しています。人生は常に過去を見ながら未来へ進んでいきますが, その



ときに欠かせないのがこれまでの経験です。たとえば後ろ向きに歩いてみると, 松林が視界に入り, 次に砂を踏み感触, 波の音, 潮の香りがしてくれば, 「ああ海辺に来ている」とわかります。しかしそれを五感で感じるためには, 海辺に来た経験がなければなりません。

同様に, 患者の口腔内が将来どのような状態になっているのがよいかは, 私たちはこれまでに蓄積したデータからある程度予測できます。歯科が介入することによって口腔機能が上がれば, 国民の健康寿命は延伸し, QOLに寄与することができるわけです。そういう未来に, 私たちは貢献できるのだと思います。

小林 ボートのイラストは, 住友会頭や松村準備委員長とお話をさせていただくなかで思いついた発想です。その意味は, まさに先ほど住友会頭がおっしゃった通りです。

「今」でさえ, 1秒後には過去になります。私たちは過去の資料を見て, 過去と対峙していますが, それでも未来に向かって歯科医療技術を向上させようとしています。そのことが, 後ろを向きながら前進し続けるボートに通じるといったのです。本学会が, ボートの舵取りを担うコックスになるという期待も込めています。

松村 ポスター中央のメビウスの輪もまた, 先ほどお話しいただいた理念に通じます。

2021年(現在)が2040年へ繋がり, それがまたさらなる未来へ通じていくという意味を込めています。

渋谷 本学会に関する過去の資料などを掘り起こしてみると, 先人たちの苦勞がとてよくわかります。日



図1 第24回日本歯科医学会学術大会ポスター

中原泉先生



本歯科医学会沿革概要（日本歯科医学会，大正12年）によれば，本学会の起源は，わが国初の歯科医師の有志団体である歯科医会（明治26年創設）の学術団体創設準備委員会だということです。

その後，時は経ち戦後の昭和24年からは主に東京都と大阪府を開催地として総会（今大会からは「学術大会」）を開催しています。運営の中心となる主幹校はいわゆる伝統校が持ち回りでやっていました。そのあたりのお話を中原先生からご紹介いただけますでしょうか。

中原 私は第18回日本歯科医学会総会（平成7年11月25日～27日開催）の会頭を務めました。会頭の打診は，当時本学会会長でいらっしゃった関根 弘先生（会長在籍期間：平成6年4月1日～平成8年9月29日）から電話で受けました。

当時，私は日本歯科大学学長に就任したばかりで，その責任の重さに震えがきました。総会を運営する費用はほとんど担当校が負担することになっていましたし，主幹校を拝命することはかなりのプレッシャーでした。

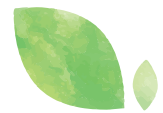
私はそれまで，決まった学校が主幹校を担うのは，単なる慣習だろうと思っていました。しかし実際に会頭をしてみると，その意味がとてもよくわかりました。主幹校が日本大学歯学部，東京医科歯科大学，東京歯科大学，大阪歯科大学，そして私の在籍した日本歯科大学に限られていた（第23回日本歯科医学会総会のみ福岡歯科大学が主幹校）のは，「旧制大学」でなければ担えないからなのです。

第18回の総会では大会の参加者は2万人を見込ん

でいましたが，それだけの規模の学術大会を開催する場合，卒業生の数が多い学校でなければ集まらないのです。事実，私が会頭のときも，全国に散らばっている都道府県校友会会長に対して，参加を呼び掛ける電報を打ちました。申し込み初日は2,000人しか登録していませんでしたが，結果的には2万人を超える参加がありました。

現在は日本歯科医師会にも主催として入ってもらうことになり，本学会は日本歯科医師会の学術組織部門になることで，日本歯科医師会の会員は自動的に本学会の会員になったため，会員数が伸びました。

併催とオンラインで 新たな歯科医療の 地平を拓く



渋谷 今大会は「総会」ではなく「学術大会」となっています。これはどのような意図によるものなのでしょうか。

住友 日本歯科医学会に加入している専門分科会や認定分科会の学術大会を併催してほしいという思いがあります。本学会には日本歯科医師会ならびに専門分科会，認定分科会の会員も合わせると，延べ10万人ほどの会員がいるのですが，その方々に参加してもらえよう大会にしたいのです。

ここでは現在の本学会の立ち位置について理解を深めていただくために，近年新しい枠組みとして発足した日本歯科医学会連合と日本歯科専門医機構について，松村先生からご解説いただけますか。

松村 まず，日本歯科医学会（本学会）と日本歯科医学会連合の関係についてお話しします。

前者は，公益社団法人日本歯科医師会の内部に属する組織です。その傘下には25の専門分科会と20の認定分科会があります。後者は，平成28年4月1日に発足した組織で，法人格を有して主に政府等からの委託業務を行うことが設立趣旨です。外部団体から委託業務を行うためには法人格の取得が必須なものが多々ありますが，公益社団法人である日本歯科医師会の内部学会においては，法的に法人格を取得できません。それを遂行するために，日本歯科医学会の関連団



体として結成しました。会員となることができるのは、日本歯科医学会分科会（専門分科会、認定分科会）です。

両団体の連携を密接にするために、法人設立の役員として、日本歯科医学会の会長が日本歯科医学会連合の理事長になっています。同様に副会長と総務理事は副理事長と専務理事として就任し、執行部も共通の人間が務めることで緊密な意思疎通が図れるようにしています。

また、日本歯科専門医機構は平成30年4月2日の設立ですが、日本歯科医師会とともに日本歯科医学会連合が法人格を持って運営に関係する団体の1つになります。日本歯科専門医機構は、第三者機関として専門医の認証を行います。専門医機構の「社員」になる条件の1つに、日本歯科医学会連合の会員であることが掲げられています。つまり、日本歯科医学会、日本歯科医学会連合、日本歯科専門医機構という3つの団体は、密接な繋がりを保っています。

渋谷 今大会は併催学術大会が多く開催されるという特徴があり、その点でこれまでの本学会の「総会」とは趣を異にしていると思いますが、そういった背景があることが理解できました。

住友 過去3大会（第21回～23回日本歯科医学会総会）においても分科会プログラムを構成していましたが、今大会からは、主催者企画講演などと併催団体のポスター発表を除き他のプログラムを公募にしました。併催団体は講演費、会場費などの負担がなくなります。このようなかたちで併催することの意味は、い

くつかあります。まず、多くの参加者に来てもらいたいということ。それから、規模の小さい学会でも興味深い研究をしている分科会はたくさんあり、それを知るきっかけになり得るということから、「隣の芝」をもっと見てほしいという思いがあります。

次に行われる第25回日本歯科医学会学術大会では、より多くの併催を進めることで参加者を大幅に増やすことも夢ではないと思います。

松村 各分科会は独自に抄録集を作成することなども可能です。また、本会の前後に独自開催やプレ開催を行うこともでき、自主性が認められていることも大きな特徴だと思います。

渋谷 かつては、個々の分科会の学術大会は、4年に1回行われる日本歯科医学会総会とは離れた日程で開催するなどしていました。今回、併催をすることによって、本学会が目指す方向性がはっきりしてきたように感じます。

ところで、今大会はまた、コロナ禍という事情もあり、オンラインでの配信が中心になることも注目すべき点です。

住友 オンライン配信によって、開催時間が重なっていても、全てのプログラムを視聴することが可能です。多職種が交わり、学術的な知識を得るきっかけになると信じています。

中原 コロナ禍になり、オンライン開催という方法には非常に高い利便性を感じる一方で、今後の開催の在り方が気になるところです。オンライン開催に舵を切ったときの議論について聞かせてください。

住友 コロナ禍で日に日に変化する感染状況を見ながら、現地開催とオンライン開催を併用させるハイブリッドの開催方法も選択肢の1つとしてありました。状況に応じて現地開催のウエイトを調整することが可能だと考えていました。

ところが、小林事務局長より状況によってそのような判断を行うのは困難だとの指摘があり、オンライン開催を選択しました。

小林 オンラインに関しては、7月12日から8月22日まで東京都に4度目の緊急事態宣言が発出される現在の状況を正確に読めていたわけではありません。ですが、私はこの件については、状況判断は必要ないと思っていました。感染状況に左右されずに計画性をもって開催を進めるためには、オンラインでやってい

小林隆太郎先生



くことが前向きな判断だと思ったからです。

今大会のテーマにもなっている「逆転の発想」はよい言葉だと思います。どのような状況でも、決めた方向に向かっていくことが大切ではないでしょうか。

中原先生が会頭を務められた第18回日本歯科医学会総会の際、歯科衛生士や歯科技工士にも参加を呼び掛けたことは、歯科に携わる全員が同じ方向を向くことの大切さを伝えたという意味で、とても象徴的だったと思います。今大会は、オンラインになったことでより多くの歯科医療に携わる人たちへの呼びかけとして、歯学系学生へも参加を呼び掛けています。

渋谷 かつては日本デンタルショーへ行ってコングレスバッグをもらって……というのが歯科医療従事者の1つのステータスのようなものでしたが、開催方式について今後はどうなるのでしょうか。

住友 残念ながら、今回、日本デンタルショーは併催のかたちではありますが延期（2022年3月4日～6日、パシフィコ横浜）となってしまいました。

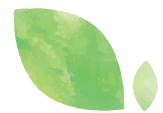
ただ、今後の学術大会の開催形式が変化していく可能性は十分にあります。コロナ禍がおさまったとしてもニューノーマル（新様式）の開催形式を模索すべきだと思っています。個人的には、現地に大勢が集まるという開催の在り方は、もう馴染まないのではないかと考えています。大勢が集まれば活気はありますが、そうでなくとも学術大会を成功させることは可能ではなく、

そうした意味では、9月23日の開会講演にご登壇いただく松村真宏先生（大阪大学大学院経済学研究科

教授）の「仕掛学」という考え方がとても興味深いです。従来の「できるだけ多くの人を集めて効果を出す」という思考回路ではなく、「可能な限り人を集めずに最大限の効果を生む」ための方法を考えていて、納得させられます。そのような発想からは、学術大会の開催様式の創生も1つのイノベーションです。

松村 どの学術大会でも準備委員会や運営組織があって、そのメンバーに大会運営が託されている点は同じです。今大会の方針が次回大会以降も必然的に引き継がれていくわけではありませんが、コロナ禍などのように予想できない事態に遭遇したときの学会の基本方針を示す重要な意味合いをもった画期的な大会になると思います。

歯科イノベーション ロードマップの 実現に向かって



渋谷 画期的といえば、本学会から「2040年への歯科イノベーションロードマップ〈健康寿命の延伸〉」（図2）と未来予想を示されたことも大きな意味があると捉えています。

住友 歯科医療は長い間、クリニカルパスが定着していませんでした。たしかに医療は人を対象にしている個人差があり、一律の行程表に沿った進行にはならないかもしれません。しかし、少なくとも行程表がなければ物事は具現化できないと私は考えていました。

産業界との関連においても、研究論文止まりで研究開発までいかないことも多く、歯がゆい思いで見ました。私に言わせれば、たとえば抄録集は宝の山です。世の中に役立つ原石が多くありますが、それが具現化できていませんでした。具体的に人的資源、物的資源の側面から考えて形にしていかなければいけません。

松村 イノベーションロードマップで設定された目標（◆マーク）には、さまざまな難易度があります。すぐにでも実現可能なものから、当分難しいものまで広範囲です。ここで掲げられた文言はずっと同じではなく、数年後が変わっていく可能性があると思います。その時々で振り返り、検証が可能になっているのです。



住友 イノベーションロードマップを確認し、適宜検証していくことで、歯科が「健康寿命の延伸」に貢献できます。そういった意味では、今大会の評価方法も重要な点です。私たちは、学術大会が歯科界の底上げに繋がり、それがひいては国民利益になると信じています。その評価の物差しについて、どう考えればよいでしょうか？

松村 たとえばアンケートなどを回収し、のちに技術がどのくらい発展しているか？ という点について、保険請求件数の増減である程度の集計が可能ではない

でしょうか。

小林 国民すべてのライフステージに継ぎ目のないケアをすることを最終的な目標だと捉えるならば、参加者からの意見を集約して保険収載を目指す方法もあるでしょうね。

歯学系の学生に参加してもらいたい理由も、2040年の歯科医療の担い手であるということ以外に、感じたことを自由に意見してほしいと思っているからです。今後のテーマをひとつでも見直すことが、価値のあることだと思います。

渋谷 たとえば、第14回日本歯科医学会総会（昭和52年10月15日～18日）のとき、今では当たり前の「臨学一体」という言葉が出てきますが、具体的には実行できていませんでした。当時、学会が診療報酬や保険収載について語るのはあまりスマートとみなさない雰囲気があったことによるのですが、保険と学問を合わせた考え方はその頃すでに存在しました。それが現在では当たり前のようになってきているのは、時代とともに新しい価値観が出てきたからだと思います。

中原 学術大会を開くだけではなく成果を明確に認識して次の世代へ引き継ぐという視点は、これまであまり考えてこなかった新しいものだと思います。小冊子を作成して配ることで完結していた時代もあります。しかしSDGsなどの重要性が指摘されている時代の要

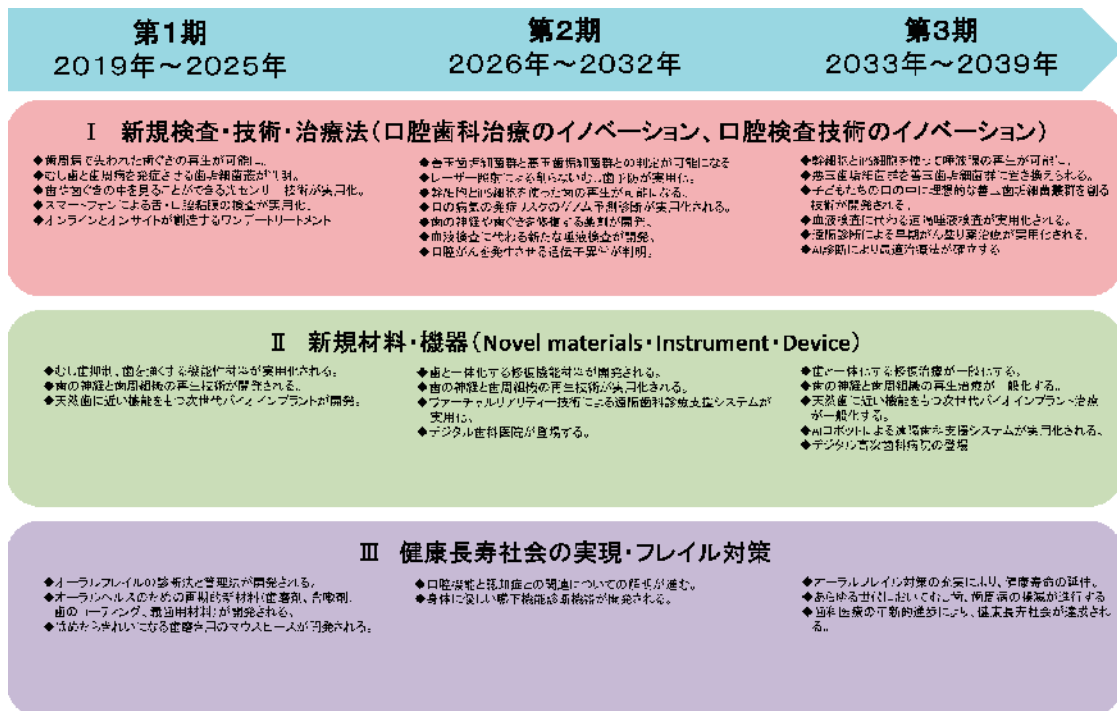


図2 2040年への歯科イノベーションロードマップ（健康寿命の延伸）

請から考えても、持続可能な歯科医療について考えなくてはいけないと感じます。

住友 私は、建設的な議論は「積み木のイノベーション」から生まれると思っています。イノベーションとは、「新結合」のことです。積み木は、横並びの関係ではなく、お互いが適切な位置にいなから補完し合う関係のことです。

だから各分科会の会員には、日本歯科医師会や日

本歯科医学会への帰属意識を高めてほしい。それぞれが技術を高めるだけでは足りず、結び合う瞬間が必要になります。そして、国民の健康寿命延伸を本当に実現するためには、臨学産官民が連携し合うことが理想です。とりわけ重要なのは、「民」の声を反映することだと思います。私はこの第24回日本歯科医学会学術大会がその未来へ近づくための一歩だと信じています。

第 24 回日本歯科医学会学術大会記念誌

2021 年 9 月発行

編 集 第 24 回日本歯科医学会学術大会準備委員会

発行者 住 友 雅 人

発行所 日本歯科医学会

〒 102-0073 東京都千代田区九段北 4-1-20

TEL : 03-3262-9214

FAX : 03-3262-9885

©The Japanese Association for Dental Science (JADS), 2021.

制作協力：医歯薬出版株式会社